

石門漫錄

特211

844



始



特211
844



石門漫錄

昭和九年十月九日



神道在信與不信

宮地水先位生真筆



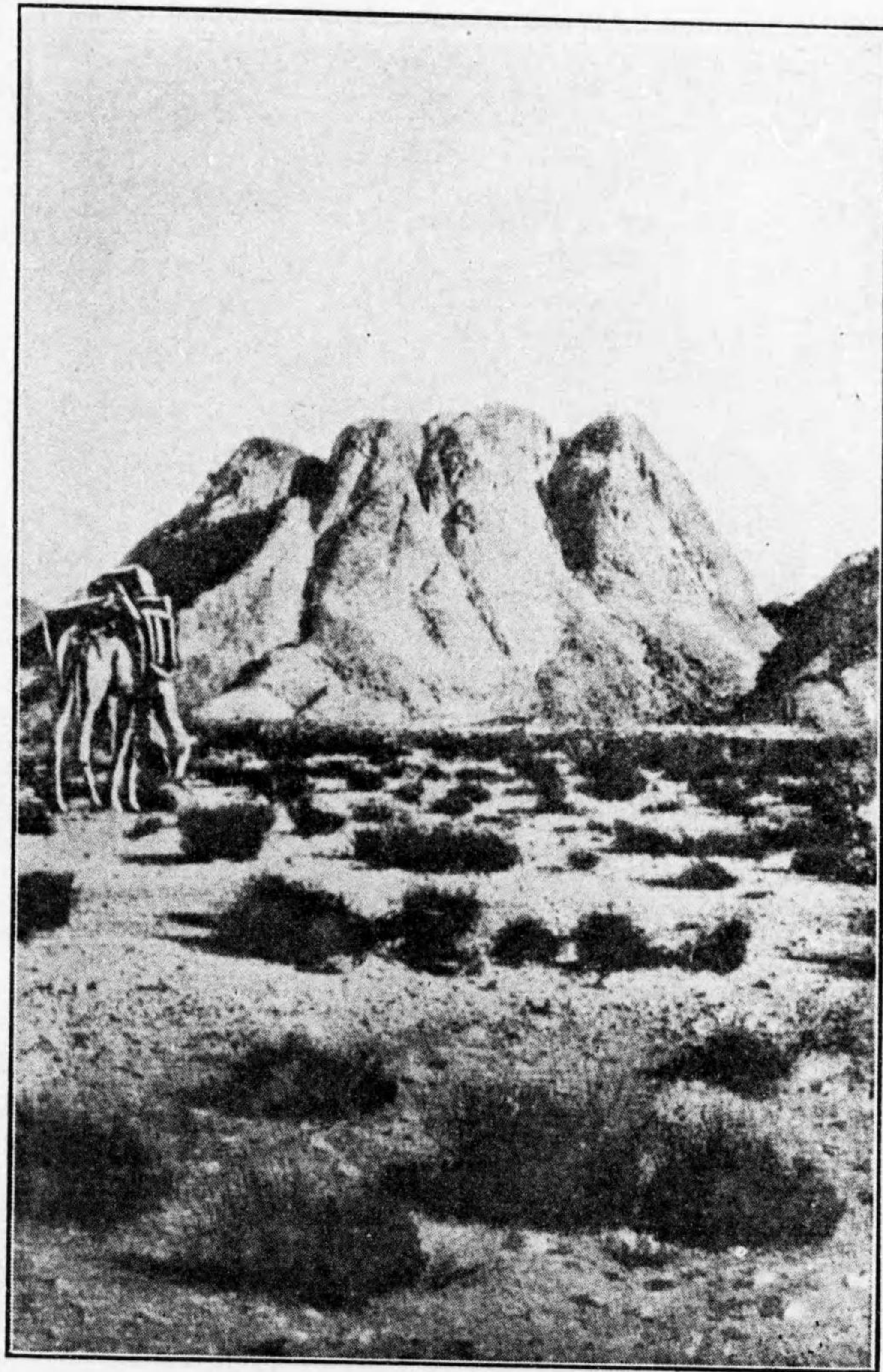
本 田 親 德 先 生



川合清丸先生



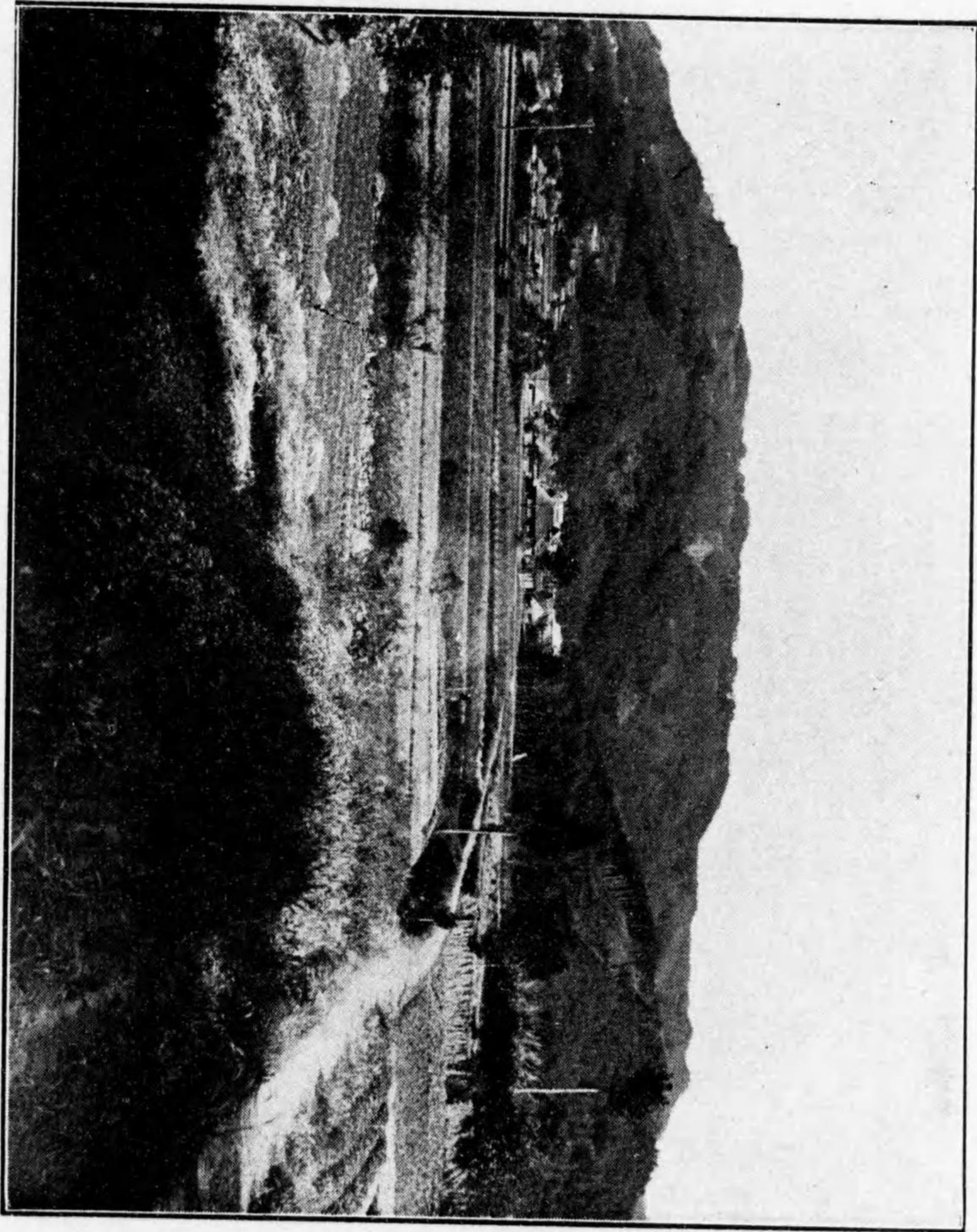
堀天龍齋先生



前年十三百四千三
山イナシるたけ受を啓天がセーモ

氣玉彦が天啓を受けたる石城山

昭和二年十一月二十二日



宣 言

— 昭和三年四月 —

- キリスト教日本國に入りて僅かに三百六十九年
- それ以前の吾等の祖先は總てキリスト教と交渉無し
- 佛教日本國に入りて僅かに千三百七十六年
- それ以前の吾等の祖先は總て佛教と交渉無し
- 天國も極樂も地獄も總て關する處無し
- それより以前の天皇、皇族、聖賢、英雄、名將、忠臣、義士、孝子、美人、すべてキリスト教と佛教とに交渉あること無し
- 吾等は須らく祖先の信仰に歸り眼界を大にして
神武天皇に歸らざる可らず
天照大御神に歸らざる可らず
- 是れ昭和日本國民全員の大自覺たらざる可らず
- この祖先の信仰に歸る道を指さすものは是れ實に我が天行居なり
- 天行居の這の大使命遂行の爲めに神代以來準備されたる聖地こそ實に我が石城山なり

石門漫錄

友

清

歡ヨシ

眞サネ

明治十九年四月二十七日。電車や自動車のなかつた其頃の大阪の春雨に烟る町は静かであつた。道頓堀には何とかいふ千兩役者が當り藝を出して居た。花街に近い墨繪のやうな橋の上はだらりの帶の舞妓が右往左往して居た。

宿屋の番傘をさして悠々とてくつて居た無々道人川合清丸翁（實は其頃は三十九歳かと思はれるから翁と呼ぶのは變だが）は静かな雨の中を西區紀伊國橋の西北詰、粕谷治助といふ家の裏の雜れ座敷に初めて至道壽人を訪問した。五十一歳の至道壽人は四十歳ばかりに見えた。顔色櫻色にして眼のふちだけ桃色を帯び眉目清秀、血色の美はしきことは東京を立つとき山岡鐵舟居士から聞いた通りであつた。

清丸翁は元來神道の家に生れ相當和漢の學にも通じ憂國至誠の吉士であるけれども其頃少々野狐禪にかぶれて居られた點がないでもなかつた。持ち前の氣性と其の立場から開口一番仙人なるものをボロクソに言ひおとし議論を吹きかけられた。至道壽人は一年後には現世を去つて尸解仙となるべきを豫感して居られた際でもあり、靜かに清丸翁の論議を聽いて居られたが、其の論旨は兎も角として烈々たる愛國憂世の至情と恬憺無慾の精神を見て取り大いに感動せられ、快よく清丸翁の要求を容れられることになつた。清丸翁の要求とは所謂仙家秘訣無病長生法の傳授である。その翌日から七日間に其の授受を終へられた。

此處に少々注意すべきことがある。後に清丸翁の書かれたものをみると、其の時の傳法は世間普通人に知らせてよい一種の養生法に限られたもので仙道の秘事には一切觸れなかつたやうに見せてあるが、事實は然らずして或る種の秘事も授けられ

たのみならず照道大壽眞の遺品も授けられたのである。其の仙法の秘事は後に清丸翁から堀天龍齋先生に相傳せられ、照道大壽眞の遺品は清丸翁から後年某大人に授けられた。そして其の何れもが別々の道程を経て天行居へ傳へられるに至つたのである。

道の畏るべきを知る者は神眞の秘事等を漫りに書きものなどにするわけがないのである。このことをよく腹に入れておかぬと物ごとを輕々しく判斷し去つて了ふのである。

或る年の夏六月七日から兩三日間、水位先生は川丹先生に伴はれて日本國及び支那の名山を巡見せられたが、周防國では先づ石城山に降られ、次いで久米山へ寄られたのに何故か石城山へ降られたことを備忘録には書き落して居られる。斯ういふところも大いに輕人の惑ふところであらう。(久米山へは大正十二年か十三年に私は一度登つたきりである。山上には降松神社カヌマツがあり、村の青年團の手で稍や公園化されつゝあつたやうに記憶するが近頃どうなつて居るか一切知らぬ。)

堀天龍齋先生と川合清丸翁との關係については大正十五年ごろ私が龍先生に問合せた手紙の返信が三四通ある。初對面は明治二十年頃とも二十一年頃とも書いて居られるが兎に角明治二十年又は二十一年頃から大正六年に七十歳で清丸翁が歸天せられるまで約三十年の間親交をつゞけられたもので、毎年又は一兩年に一回位の清丸翁は龍先生のところへ遊びに來られ十日間乃至十五日間位の滞在せられたさうである。尤も此の三十年間中清丸翁が病氣のために龍先生を訪問せられなかつたことが三四年つゞいたこともあつたらしい。又た清丸翁の晩年にはどうであつたかと思はれる點もあるが其れは承はる機會を逸した。

それほど長い間親交をつゞけられたのに何故に龍先生は清丸翁に對して太古神法の話を致されなかつたのか少々不思議と思はれるほどであるが、これは龍先生の或る深慮によることであらうし又た一つには清丸翁が九歳の年長者であつたので後事を託するには別に其人ありと考へられた爲めであつたらう。併し何かの機會に天人

一系ともいふべき皇國古傳の純正なる太古神法といふものがあるといふ位なことは話されたに違ひないと思はれるし、或る時代には其の爲めに龍先生が潔齋中での一切の俗交を斷絶して居られたことなども清丸翁の承知せられぬ筈はないが、恬淡な性格の清丸翁は左ういふことは強いて聽かうともせられなかつたものと考へられる。尤も伊勢神宮の心の御柱について、又た丹波元伊勢出土の神器については二人で研究せられたこともある由を後年龍先生から直接承はつたこともある。

清丸翁が年長者であり又た照道大壽眞所傳の仙法祕事の二つを傳へられたからと云つても師弟關係ではなく全く同等の友人關係であつた。清丸翁が龍先生の爲めに書いて贈られた額が只今無方齋にあるが、それには『爲堀龍屋君、川合清丸書』とある。近ごろの人は友人や又たは部下の者を呼ぶに君クニといふけれど、元來『君』といふ敬稱は充分に尊敬を籠めた場合に使つたもので、東海少童君、清淨利仙君といつたやうな用例を以て知るべきである。清丸翁が其頃やつてをられた大道叢誌○道○叢○誌○の合本の廣告文にも社長鳥尾小彌太君題字、子爵三浦梧樓君題字、伯爵東久世通禧君

題字、伯爵冷泉爲紀君題字、伯爵大原重朝君題字といふ風に充分に尊敬の意を表した敬稱に君と書いてをられるので清丸翁が其頃君といふ字をどういふ意味で用ひられたかゞわかる。無々道人題とか山陰道士書とか洒脱にも書かれず謹嚴に川合清丸書と署名されたのも誠意を籠められて題贈されたものであることがわかる。

私が十四五歳の子供の頃、身體が弱かつた爲めに或る先生が一冊子を貸して下さい、『これを読んでみよ。』と云はれた。これこそ實に川合清丸翁の『僊家秘訣無病長生法』であつた。私は振假名をたよりにして熱心に読んでみた。照道大壽真とか至道壽人とか云ふやうな名は其のとき始めて知つた。併し其れから何十年かの後に照道大壽真や至道壽人や川合清丸翁と間接ながら或る關係をもつ立場にならうとは夢にも知らなかつた。人間の運命ほぐしびなものはない。今朝鹽漬の木天蓼を嚙りながら茶を飲みつゝ、臃ろげなる記憶を辿つて少年の日を懐ひ多少の感慨無きを得ぬ。

人間の運命ほぐしびなものはない。世の中の多くの人は運命を云々する人を迷信者と嘲けるが、私は運命論者であり又た運命の信仰者である。しかし私は釘づけにせられた不自由なる運命論者ではない。運命を信すると同時に運命を創作せんとする運命論者である。嚴然たる運命の天律の存在を知つて之れに順ふと同時に其の運命を眞に意義あらしめるために努力せんとし、或る程度まで其の運命を改造し吉化せんとするものである。『運』といふ文字が元來釘づけにされた意味を有せず活きて動きつゝあることを意味して居るのである。卑俗な言葉を以て換言すれば、よい運命も心がけの如何と努力如何では腐つて了ひ、わるい運命も心がけ次第努力次第で或る程度まで改造し得られるのみならず、非常なる大決心と大努力とによれば司命神の密策を感動し得て新たに天運を創作し得ることも不可能に非ずと信するものである。世人は性急にして毎に鶏卵に時を告げんことを求め、善を修して直ちに福を見る能はざれば疑ひ、悪を行ひて直ちに妖災に會はざれば天何かあらんと見くび

るのである。因果關係を餘りに短距離に打算して、菓子屋の隣りで齒醫者を開業して繁昌しなければ天律を疑ひ神界の攝理をあなごるのである。善人が病氣したり貧乏したり徳行の士が災害に包圍されたりするのをみて神眞界と人間界との交渉を疑ふのである。顯幽一貫の神策を掌上にみれば善因善果惡因惡果の天の法律は微細なる一毫の狂ひもないので、そこに『運命』といふものが形成されるのである。運命を嘲けるものは天を嘲けるものである。

晋の文公が出獵して大蛇に道を阻まれ、大いに深省して退いて徳を修め善政を行ひたるに其の大蛇は天帝の罰を蒙つて死んで了つたといふことがある。臣下の者が『禍福すでに前に在り、轉ずべからず、何ぞ遂に之を驅らざる。』と奏上したとき文公は『禍福未だ發せず、猶ほ化すべきなり。』と云つて車駕を還したのである。文公はよく古人の訓へを守り天を畏れて天の道を得て居た人であらう。

天龍齋先生が歸天半歳前、すなはち昭和四年の夏に、『澤之鶴』といふ酒の廣告の團扇の裏へ『なせばなりなさねばならずなることをならずといふはなさぬなりけり』

といふ道歌を書かれた。これは誰れも知つて居る歌であるが、手紙より外のものとして此れが龍先生の現世の絶筆であつた。龍先生は決して釘づけにされた運命論者ではなかつた。天命を信じ、天命に應じ、天命に順ひ、天命を行ひ、更らに天命を創造打出せんとせられたのである。岩間山に住んで居られた山人界の巨頭杉山清定先生も『出來ると思へば何でも出來る。これが萬事の秘訣ぢや。』といふことを常に弟子達へ申し聞かされた。天行居の同志諸君も各自に其の天縁と使命とを自覺されると同時に引ッ込み思案に過ぎると天縁を腐らかして了ひ天賦の使命が時効にかからぬとも限らぬ。天行居に對するは鏡に對するが如く、吾れより一步近づけば彼れも一步近づき、吾れ一步遠ざかれば彼れ又た一步遠ざかるに至るのであるから、よく其邊を考慮せられねば、『本部からか又たは宗主から何か言うて來なければ出かけて行つたり色々なことを提案したりすることは致しにくい。』といふやうな遠慮があり過ぎることは感心いたしかねる。本部から又たは宗主から誘ひかけるといふやうなことは出來ることであるまい。天行居は去るものは追はず來るものは拒まずで

ある。その他のことも神のまに／＼である。天行居の所謂最高幹部には何等閑的考へも無く何の申合せもないことを明言しておく。

水位先生が川丹先生に連れられて石城山や久米山（石城山から四五里西方、下松クダマツ驛より山麓まで一里ばかり、石城山より低い位な山で緩勾配の道で下駄ばきで登山は容易。）へ來られたときには祝島イハヒジマへも立寄られたやうである。（近來は川丹先生も水位先生もしば／＼石城山上へ立寄られる。）

石城山上の勾玉原から望めば千坊山脈を越して淡き黛色を見せて居るのが祝島である。（昔は齋イハヒの島とも云つた。）上之關から海上五里、毎日郵便船が便乗させてくれる。

今から十年ばかり前、大阪朝日か大阪毎日に瀬戸内海の仙人島として此の祝島が書かれたことがある。それは此の島に長壽者が多かつたからであるが、近年は漁業關係などで島の人々が出て行き餘所よその人も來るといふやうなわけからか目立つ

て長壽島といふほどでもなくなつたといふ話である。

山頂は行者ヶ森といつて役エツの行者の遺跡があるといふ傳説であるが、それは話の筋が違ふだらうと思はれる。尤も中古以來兩部まがひのものが住んで佛道的な道場もあつたのであらうことは否定はせぬ。

全島殆んど櫻の老木で花時は壯觀を呈したものであるが、島人が薪に濫伐する爲めに餘ほど少なくなつた。それでも見るに足るものがあるので先年は何とかいふ東都有名の書家が來て激賞したといふことである。近ごろは村の申合せで保勝會のやうなものが出來、無茶苦茶に伐り倒すことは禁じたらしい。

この島に『こつこう』といふものがある。不老長壽の効があるとかいふことである。獼猴桃びこうとうと云つて支那の何處かにもあるさうで先年一寸書きものを調べたこともあるが只今それをさがし出すことは面倒だ。七八年前だつたか神宮皇學館の大川眞澄翁が珍しく大病で入院せられた頃どこで聞かれたものか此れを送つてくれとどこで少々送つたことがあるやうに記憶する。天龍齋先生へも御目にかけたことがあ

るが『米俵に似た形が面白い。』といつて喜ばれた。紀州にも陸中の山中にも北海道のごこかにもあるとかいふ話も誰からか聞いたやうに思ふ。

この島に大きな蓬があつて其れが杖になるのである。今上が東宮に坐せし頃本縣へ行啓の御みぎり、縣からか青年團からか此の蓬でステツキを二本作製して石城山の東部の村落に居る白蛇二疋とともにたてまつりしことありしかと仄かに記憶する。生物學に深き御興味をもたせ給ふ殿下は當時『シロ』といふ名まで下賜されたといふことを新聞紙上で拜見したことがあるが今その白蛇は尙ほ宮中の御研究所に飼育してあるかごうかは承知いたさぬ。この島の蓬の杖は天龍齋先生へも差上げたことがある。(その杖をもたれた寫眞が昭和四年か五年かの古道紙上に掲載してある。)しかし近ごろは蓬も年々小さくなつて杖にし得るやうな大なるものは稀れになつたさうである。(巻頭寫眞参照)

この島の出身で河野蓬洲翁といふ老人がある。この老人は長い間支那に遊んで書

道の研究をした人である。其の祖先は例の伊豫の河野通有の一族に出て居る。無方齋の玄關に掲げてある『桃花源』の額は此の老人が自から書き自から彫つたものである。

四五年前この蓬洲翁が突然やつて来て、祝島の山上近きところにて桑の古木が倒れたが實にみごとな材で大きなものである。引取つてはごうかとのことであつた。それで机や火鉢など造れば面白からうと思つたが、其頃少々都合があつて買取り得なかつたのは残念千萬であつた。

石城山の西北數里を距て、八代村(古稱社村乎^{ヤシロ})といふ高原地帯の一寒村がある。この村は鶴の渡來地として有名で毎年その時期になると數百羽の鶴が白頭山の方からやつてくるので、其の時期には鶴見客のために臨時に宿屋も出來れば自動車も通ふといふ勢ひである。其他石城山附近にはこんな仙境じみたところが今尙いろ／＼名残をこゝめて唯物的文化に血眼になつて現代人に冷やかな微笑を投げかけて居る。

氣がついたから一寸申しておくが、敬神家の中には色々な人があつて、諸神社の御守り札を幾十或ひは百以上も一つの袋に入れて大きな拳大の守袋をかけて居る人を見受ける。わるいこともあるまいが夏服でも着られたときには随分不便であらうと思はれる。其の人が特に感ぜらるゝ或る二三體なり七八體なりを袋に納めて拜帶せられ、其他は小さな唐櫃からづか小宮にでも入れて神殿なり神棚なりに奉安しておかれてはごうであらうと思はれる。大きな御守袋をかけて居れば大きな御神徳を蒙られるとも限るまい。

それについて御参考のために申上げるが、水位先生の親族に濱田嚴彦氏といふ人が居られた。(高知縣で郡長なども勤められたことがある。)この濱田氏が或時土佐の沿海を旅行中に海が荒れて船が難破し氏は九死に一生を得て不思議に命拾ひをせられたことがある。ところが其のとき自宅の神殿に奉安してあつた桃板の庚申守が錦の袋と共にびしょぬれになつて居たので驚いてよく調べてみられると其の水は塩分

を含み海の匂ひがして居り全く海水であることがわかつた。(其の桃板の守りは水位先生が修法されたものである。世の中に桃板の庚申守の方法は流傳して居るが水位先生の法は少々異るところがある。)

この話は右の濱田氏の夫人満壽子刀自から私が直接に聞いた話である。世の中には此れに類した話は随分あるやうである。

庚申といふことについて水位先生は次ぎのやうなことを云つて居られる。

庚申の祭祀は赤縣州の祭祀にして人の體中に三尸とも三魂とも云へる魂魄の部類なる惡念妄想ありて庚申の夜眠る人あるときは右の惡念なる妄想天曹の生録死録を司り給ふ大司命小司命の眞神に感通す、於此司命の神其人の罪咎を死籍の録に著して其人の罪の大小によりては年の數を奪ひ月の數を奪ひ日の數を奪ひ玉ふよし雲笈道藏等の書籍に多く出で玄學家には必ず庚申夜司命神を祭るなり、然るに此の庚申祭は神農の世に起りて周の世に盛んに老子時代に至りて益々行はれて老

子大いに此の庚申に心を用ひ感應編を作れり、偕又我國にては庚申の夜に猿田彦神を祭りけれど實は右に云へる司命祭にぞありける、………偕また庚申神の司命なるに猿田彦神を祭るは不當なれど猿田彦神とのみ唱へて祭るときは又た猿田彦神の幸ひ給ふこともありて村田正名の回國記なる天正元年十一月七日の條によれば、戸隠山の小さき社に臥したりしに五更の頃に及びて老翁の忽ちに現はれて、あは猿田彦と名は云ひて四方の國々を廻り鬼神を慰め惡魔を逐ひ十一月七日の夜には必ず此處に息へりと宣ひけるに、正名敬禮して御神に向ひ、世に庚申の夜に猿田彦神様とて祭り候は御神にて候やと尋ねければ、御神のたまひけるは、庚申の夜は上古に西國にて太一天王としのたまひける天津神を祭りて壽命長久を願ひける夜なるが是れには深き故あることなり、又た右の夜には天津神國津神の天上に會し玉ひて諸民の壽命の伸縮を議し玉ふなれば伊弉諾神を齋ひ奉ることは更に又た大國主神とて敬ひ奉る時はまた此神の御惠を垂れ玉ふべし、又た猿田彦神とし祭るときは余も幸福を下し守るべし、また皆人の信仰によりては何神と差別

なく敬ひ奉るときは庚申夜に至らば其の祭る家に下り玉ふもあり（下略）云々とあるを思ふべし、………

村田正名が拜した神人が果して猿田彦大神であつたかどうかは確言いたしかねるが其の申されたところは道理あること、思ふ。併し如何に庚申祭を精出して執行しても根本問題は其人の修善積徳如何と信心如何とによることで、神様を拜みさへすれば幸福が得られると思ふことは大間違ひの骨頂で、如何なる場合にも善因善果惡因惡果は幽顯一貫の神律天則である。神律天則が即ち道である。古人が『神も道に勝たず』といったのは此のことである。

x

x

x

原史時代から先史時代にさかのぼつて考古學的に又た土俗學的に研究するとき、どうも我國が神仙の神區だとか神の宗國だとかいふことが肯定できなくなると思ふ人があるかも知れん。これは一應尤も千萬なことである。それは多くの出土品等の中に或る一二のものを除くの外は神仙の遺品ともみるべきものが殆ど無いからとい

ふことに理由する。しかし其れは神眞界と現俗界との出入によつて物質に神祕なる化學的變化が行はれる爲めと、又た何等かの理由により特に神眞の思召しによるものの外は所謂神かくしになるが爲めとであることを理解すれば腑に落ちない筈はあ
るまい。

河野久氏は照道大壽眞が明治九年七月七日に吉野の仙窟より上天せらるゝところを近距離のところにて拜觀を許され、その直後に大壽眞の御遺品等を拜領せんものと其の窟に入りたるに一品も無かつたのである。(其の以前に大壽眞より頂戴せる品が二三あつたのは別として。)大壽眞が平素着用されたる越後晒しの紋服や貞宗の刀や熊の毛皮の腰巾着や焚香の具等は其時どうなつたであらう。更らに上天の時の御服飾たる峨然たる金冠、白き指貫サシヌキの黄金地コガネヂに赤萌黄まじりの紋織錦の装束、總金キン作りの光明燦然たる太刀等は突然どこから出て來たのであらう。そのわけのわからぬ人々へは如何に神眞の實在を話したところで眞に腹入りせしむることは困難であらう。上天せらるゝ十五分か二十分間前には其の窟中に於て泰然と坐されたる平素

の通りの御服裝の大壽眞の前に河野氏は侍坐して居られたのである。

支那の神仙思想が日本に輸入されたのは奈良朝時代または其の直前であつて、我國の上古とは無交渉であつて我國が神國といふ意味と神仙思想とを習合したのは中世以後の有難屋の妄想の産物だと思つてゐるのが此頃の普通の學者の常識である。河野氏も或ひはそんなものかとも考へられたと見えて其のことを照道先生へ質問されたとき、大壽眞は大いに笑ひ玉ひて『支那の仙道の根本は我國の古神仙たる少彥名神や大名持神たちが彼地に渡りてのこされたる遺跡である。』と明確に申された。照道先生とは目前別系統のやうに思はれた水位先生も又た同様のことを何度も機會ある毎に力説して居られる。照道先生も水位先生も肉身を以て神仙界に出入された御方で、あやしげな所謂神憑りまがひのもので神界の消息を口走るものゝ所傳とは全然わけが違ふのである。

支那の神仙思想は戰國時代以來のものであつて、混亂した社會相對する厭世思想から高踏的獨善主義となり、それから更らに空想的な理想世界に發展したもので

あるやうに普通の學者は眺めてをる。しかし其れは所謂神[○]仙思想であつて、中古以來の僞仙の蹤跡に過ぎないので、太古に於ける眞の神[○]仙道が殆んど地上から姿をかくして後に周代以後の學問が起り、更らに種々の思想が湧いたり拵らへられたりしたのであることを忘れてはならぬ。(『神界の經綸と天行居の出現』參照。)

私は神[○]仙界即神[○]祇界といふことを多年唱道して來たが、これは一般神道家のみならず天行居の同志中にも不服の人があるらしく思はれる。川合清丸翁の如きも神と仙とを區別して論せられた時代もあつたが、それは俗社會を避けて入山し不老長壽の修行をしてゐるやうなものを仙といふ意味ならば其れが直ちに高貴の大神と同等であるとは申されぬこと改めて言擧げする迄もないことである。けれども神にも高下大小の段階ある如く仙も亦た然りである。大神仙としての伊弉諾神や少彥名神は『神』としての伊弉諾神や少彥名神とは異なるといふ議論が成立たない限り神[○]祇即神[○]仙である。仙といふ文字が妥當でないならば眞といふ字に改めて神眞と稱してもよろしい。唐詩『將軍の樓閣に神[○]仙を畫く』といふのも神と仙とを別々に見たのでは

ない。根本的に考へ直して、神とは何か、人とは何か、仙とは何か、それを本質的に考へてみられるがよろしい。いつも云ふことだが『人』といふもの、大神[○]祕性が腹入りせぬと、ごうも話が纏れやすくなる。地上神界の中府たる神[○]集岳は所謂神[○]仙界の大府であつて、眞の神[○]界よりは下等な存在だと思つてゐる人があるらしいが、そんなら眞の地の神界の中府は何處にあつてごういふ形狀であるか承りたいものである。畏れながら伊弉諾神や天照大神の宮殿があり、少彥名神や大名持神の常居の宮殿があり、神武天皇が左察判鑑として大坐^{オホマ}しまし、菅公や其他の神々が居られる神[○]集岳や萬靈神岳を外にして、地の神界の中府が何處に存在するか。

幽眞界は八通りに大別され、それが縦にも横にも幾百千萬に別れて居るから神[○]集岳や萬靈神岳の外に地に屬した神界無しといふのではない。地上隨所の上空のみならず山河湖海神社仙宮等の所在につれて種々大小幾多の神眞界はある。又た遠く日月や諸星辰に屬する神界や魔界も存在する。けれども此の大地球の生類統制に屬する限り、其の神界中府は神[○]集岳であるといふのである。

× × ×
同じく神仙界へ出入した人の所傳でも、ごうも甲者の所傳と乙者の所傳とに吻合しがたきやうに見ゆる點があり、それが神仙界認識の上に妨げになるといふ人がある。これは深き幽律によつて然るべきことであり、又た其の出入者の靈的感應力によつて所見所聞の氣線が變化するからである。

水位先生の『異郷備忘録』には餘り重要ならざる事項が混記してあるため、全篇を軽々しく讀了し去る人があるけれど、實は其の中の二三のものは地上人類生活創始以來無前の重大記録である。古今東西多くの幽眞界交通者には無識無學の人や甚だしく獨斷的傾向の人が多く、たまに立派な紳士があつても其の感應交通の幽界が低級な或るクラスに限られて居る人が多いが、水位先生は學識あり冷靜な批判力反省力ある紳士であるのみならず明確な實證ある謫仙であつて、最高級の神界より低級の種々の靈界にも交通せられた。そして時には神眞界の或る物品を現界に將來せられたこともあり（私は其れを拜觀した）又た現界の紙墨を携帯して神界へ行かれ

て見聞を圖寫せられたり、神仙の御染筆を願はれて現界へ持ち歸られたりした。（原則として現界へ長く逗留るべき書きものは現界の紙墨を用ひなければならぬわけあることで、神界の紙類等へ書かれたものは現界へ置くと炎上したりして神界へ取返されることになる場合が多いものである。）

水位先生が晩年（數年間）病牀に懊惱された理由は他にもあるが一つには『異郷備忘録』等によつて神界の祕事を人間界へ告知せらるゝ便宜を計られたが爲めで、受くべき責めは受けられて、歸天後は高貴の神眞の寵愛を蒙られ榮任せられたのである。この邊の事情については神界の規則と攝理とについて特別の考慮を爲し得る人でなければ腹入りの六かしい點があらう。（先生の書かれたものゝ中には別に『幽境七十八區記』といふ祕録もある。）

要するに諸君は心身を清め、深夜獨坐、明窓淨几のもとに靜かに『異郷備忘録』を拜讀し心讀して人類最高の知識を求められるがよろしい。これを公刊物にしたことは私として一生の大罪であつた。

神界の祕言咒言といふやうなものも大體に於て三つの様式がある。一つは所謂我國の古言雅言に類したものの、一つは梵音か支那音かと思はれるやうなもの、一つは右の二者を混雜したやうなもの又は普通の文章體の如く其の意義の何人にも稍や諒解し得らるゝもの、以上の三系統に大別し得られるやうである。所謂我國の古言雅言に類するものでなければ正神界のものに非ずと思ふやうな人は神界の實消息に暗いのである。普通の學問の上から云つても、我國の古言雅言なるものが何うして成立したものであるか、卑近なところでは支那の古言と我國の古言と如何なる關係があるかといふやうなことなども相當に研究されて居ることであつて、決して我國の古言が世界特絶のものではないのである。又た神界の祕言咒言が歐米人に示さるゝ場合は如何なる體系によるであらうか、同義異音の場合もあるべきは當然のことである。私が今こんなことを云ふのは決して祕言咒言に關してのみ云はんが爲めに云ふのではない、一を以て十を判斷せらるゝ考察方法の一つとして御參考のために婆

言するのである。

世の中に昔も今も謫仙といふものは随分あるけれど其れを自覺して居る人は極めて稀れである。水位先生の如く明確に其れを自覺せられ且つ肉身を以て現界時代に神界へ出入された人は古來稀有中の稀有のことであつて、これ深き御神慮によることで破格の立場を許されたものと思はれる。だから水位先生の神眞の祕事に關する知識は何れも親しく實聞實見せられたもの又は高貴の神祇や師仙から相傳を受けられたものなので、人間界流布の書籍等から抄出されたものではない。(二三それもないではないが)然るに近ごろ同志中には石城山へ來ることもやめて、大金を投じて仙書を蒐集し刻意苦心して讀んで居られる人もあるさうだが、御苦勞千萬なことである。水位先生は人間界流布の仙書の研究にも随分努力せられたことは既に一部の人々の知る通りであるが、

道書三千七十二部を讀み破りて後、今日に至りて仙書を熟考するに三千七十二部

の中に真と認むるもの十一部のみ他は皆偽仙の忘誕のみ、然るところ真傳十一部の中にも亦た忘誕混合せり、云々

と手記して居られる。一と口に三千部と云へば何でもないが一日一部を讀みても十年の歳月を要する。先生が三千七十二部を讀破されたことも失禮なことを申すやうであるけれど只だ先生の道樂としての努力に過ぎなかつたのである。世の中に何が御苦勞千萬だといつても古來汗牛充棟もたゞならざる偽仙の書を讀むほど御苦勞千萬な馬鹿げたことはあるまい。

やたらに山や野を掘つてみたところで何十年たつても金も銀も出てくるものではない。金を掘らんとするならば金の鑛脈を掘らなければならぬ。

『天行居の十年前來の種々相を見つめて居ると案外と思はれることがないでもない、たとへば山陰道場や四國道場の閉鎖當時の事情と云ひ其他これに類したことが其後も絶無とは云へないやうだが。』と質問して來た人がある。

私は私の認識を必ず正確なりと公言し得るものではない。換言すれば私の認識の誤れることも多いであらう。けれども或る手續きを経て認識を決定した場合に限り、幽顯遠近斷じて誤ること無しと信じてをる。但だ神祇の攝理によつて特に或る時期まで殊更らに知らしめられざる事項は其の時期到るまで尋常茶飯事と雖も之れを知ることには出來ぬ。碗の中の料理のバイキンまで見えては何も食ふ氣になれず。一里先の便所の臭氣まで感じてはたまつたものでない。十里外の工場の騒音まで聽えてはやりきれず。或る程度まで見えず感せず聽えざればこそありがたいのである。

鼠が騒いで困るから五六疋つゞげさまに捕つたら其頃から家族の者が病氣になつたが何かわけがあるのであるまいかと訊ねて來られた人がある。例によつて一切返信いたさず置いたが、少々思ふところもあるので茲に一言する。

原則として神祇は人間生活の正しき幸福を保護せらるゝものである。人間生活に

有害なる存在を除滅することは神慮にかなふのである。仁慈といふことを妄念して害虫を退治することすら怖るゝ人があるが是れ人天の權威を傷け却て妖魅の跳躍に便するのである。動物愛護といふことの如きは人間性の美しき發露であるけれども田畑を荒す野鼠や猪を退治したり五穀野菜を害するものや蚤蚊其他毒虫毒蛇の類を退治したりすることは善でこそあれ寸惡あるにあらざること今更ら申す迄もないことである。上古の日本人は明朗快活氣象雄大にして正を履みて怖れず人間生活の必要のためには爲すべきを爲して微塵も躊躇することなかりしに、こましやくれたる外國の種々の思想入り來りてより筋の立たぬ仁慈や不合理なる慈悲の念に左右せらるるもの多きに至りしは慨かほしきことである。吾黨の人々は能く理非を辨じ、人間生活を基本とする仁愛の美德を涵養實行すると同時に其の前路を妨ぐるものは片ツ端から左右に斬て捨て、平然たる正大なる上古日本人の本心に立歸らなければならぬ。左傳宣公四年に『仁なれども武ならざれば能く達すること無し。』とあるのは古風である。

水位先生の令嚴宮地常磐先生が書かれた家訓の一軸がある。ぼろ／＼に破れ且つよごれて手のつけやうもない状態であつたが、洗つて手入れをして表装したら垢も抜けて破れ目も見えず立派なものになつたので先年〇〇家へ送り届けた。其の家訓といふのは次ぎの通りである。

人の道たるや執本を第一とす身の本は神なり故に常によく神に敬事し大空幽境ありて黑色の玉殿澤光を放ちたるに神等の坐して幽政を掌り給ふ事を畏み奉りて生ながらに幽冥の宮舎を拜み奉る心掛をすべし

神に敬事するは空飾空拜にあらず身力を盡して鴻恩を謝し神隨の誠の道を彌益々に擴め神の人を愛撫し給ふ萬一を扶け奉らむ心掛を肝要とすべし

神恩君恩を忘れて身を恣にし神と君とを輕蔑侮凌するものは神敵朝敵國賊にして不忠不孝の極り也神仙の惡み家も身も滅亡せざることなしと知るべし

書讀博識を慢するの爲に非ず神隨の大道を明らめ擴むる羽翼とすべし

古今内外の事情を知らざれば頑愚にして身を立ること難し故に研究練磨してますます神國の神民たる義務をつくし道に功を立つべし

神に敬事するの門は親族を協和するに在り各身を省みて過を改むれば和せざることなし家内親戚和せずして神に敬禮すとも神の受納したまはぬことゝしるべし身を立つる礎は堪忍の二字に在り一時の忿怒に損失すべからず貪欲を堪忍して節義を思はゞ高きを望まずして自から高きに登り得るものと知るべし

右七條家に主たる者宜しく得心して常に家族に示諭すべし余や年來風症に罹りて筆を執ること難し故に左手を以て概略を記し家の規矩に備ふと云爾

明治十三年六月二日

宮地常磐 印

御署名の下に二印があつて、上の印には玄心の二字があり、下の印には上事於君下交於友内外一誠終能長久敬父如天敬母如地汝之子孫亦復如是の三十二字がある。これは人に示される目的でなく只だ御遺族のために執筆されたものであるから些の文飾無きは勿論まことに平易の語句ではあるが先生が全精神をこらして書きのこさ

れたものであることは何度も繰返して拜讀して居ると漸くにして次第にわかつてくる。淡として水の如き言葉ではあるが受用不盡の妙味ある金言である。宮地水位先生の血脈は事實上今日では斷絶して居るけれど多くの江湖同志諸君が此の家訓の精神を體得せらるゝならば先生も常磐先生も却て御満足であらうと信ずる。

しかし此際少々附言して愚意を申し上げておきたい。大空幽境ありて黒色の玉殿澤光を放ち云々とあることに或ひは奇異の念を生せらるゝ人があるかも知れんが、黒色の外觀と云つても決して陰氣な感じのするものではなく、黒色の塗料や石材等も實に麗はしい奥床しい光澤を放つて何とも云へぬ神々しいものである。天上神界の山岳には紅瑪瑙や種々の色彩の水晶や硬玉や其他の寶石が澤山にあつて其の加工せられた調度品も美觀を盡し、殊に其の硬玉 (Jade) — 青瑯玕 — の如きは其の質すぐれたもので勾玉等にも加工せられ、其の勾玉は國土降臨の諸神によりて地上に將來せられたものが稀れに土中から發掘されることもある。御殿の内部は種々の珍奇の木材や寶石金屬等にて美麗に出來て居り、黒色ではないのである。

勾玉については本年五月印刷刊行せる『天劍祕帖』の中にも少し書いておいたやうに思ふが、硬玉は我國に産せざるものであるから考古學者等は支那から原料が輸入されたものと假定して居るが、勾玉には深き神祕のわけあることで其の起原も決して動物の爪牙に由りたるに非ずして太古神法と密接の關係があるのである。畏れながら三種の神器は何れも至貴至重のもので何れを重しとも申すことは出来ぬが、皇統の紹傳はミスマルノ勾玉が其の印信なること神典を正讀すればわかるのみならず神界の實相も左うである。世界各國の出土品には劍鏡其他類型のものが多ければ勾玉だけは日本國土が斷然唯一と云はざるも殆ど唯一に近きもので、これは天上の制にならひて神人相承け比較的後世の人間界にまで其の制が傳へられた爲めである。この序でに思ひついたまゝを述べておく。(本年五月刊行の『天劍祕帖』は僅かに五十部を印刷し内務省に二部を納め、二三の人々にお目に向け、殘部は密封して保存してあるのである。)

x

x

x

天上神界と一口に云つても大空中の神界も種々あるのみならず無數の星辰界にも殆ど神界または魔界または其の中間のやうな界が存在する。それも必ずしも一星辰界に一神界とは限らず大概複數的に存在する。早い話が吾々人間に親しみの深い月球の如きでも神界もあれば地獄のやうな界もある。望遠鏡的の觀察では月球の如きは生物の生活に適せざるところのやうであるけれど、其の神界には百花咲きみだれ蒼々たる山岳も清らかな流れも靜かな森も野もあり宮殿樓閣も想像の外に美しいのである。火星の如きも地球の大氣の五十分の一しか持つてをらぬけれど其れは何の關係もない。又た反對に金星の如きは地球より幾倍か豊富な大氣の持主で氣候は一時も安定せず激變を繰返してをるけれど其れも其の神界には何の關係もないことだ。幾億年の昔の地球だつて同様の意味のもので、現界的には雲霧風雷大雨の荒れ狂ふ中に猛獸毒蛇の類が活動してゐただけだつたけれど神祕の生活には無關係であつた。しかし神祕と雖も現界に交渉せられる場合は地上大氣の關係等もあるので其れ相應の姿や行動を致されたと申すまでのことである。

天上のみならず地上にも水底にも種々の神界や靈界のあることは此れ又た多年くり返して話して通るである。

川合清丸翁のことを一寸書いたが、川合先生の神道觀と私どもの神道觀とは必ずしも一致するものではない。川合先生は元來神道家の血を承けられた御方であるけれど、中途から故ありて神儒佛三道一致を標榜せられて活動せられたことは餘りにも世人の記憶に新たなるところであらう。しかし晩年は又たどうしても神道一本で行かなければならぬといふことをひそかに痛感せられたやうであるけれども、色々の事情で充分に抱負を述べられる機會を得られなかつた。又た其の神道に關する諸學説も吾々とは一致がたいところがいろいろあるやうである。けれども川合先生の志の存するところは即ち吾々の志の存するところで決して相違したものでない。此の意味に於て川合先生は私ども天行居同志の尊敬すべき大先輩である。又た堀先生と親交のあつた關係は一層わたくしどもに何とも云へぬなつかしみを覺えし

める。又た冷靜に明治年代の我國の思想界と川合先生の努力との關係を觀察してみると、ちやうど今日の我國の思想界と天行居同志の努力との關係に酷似して居る。照道大壽眞の或る遺品が川合先生から某大人の手を経て近く天行居へ納められるといふことも雲堂先生から聞いたが面白い因縁である。

數年前來俄かに我が國風にめざめる運動が勃興し其の勢ひとして各方面から我國の上古史が新たに研究されるやうになつたことは結構なことであるが、俗説邪説が新研究とか科學的研究とかの面をかぶつて盛んに跳躍するのは馬鹿げたことである。

其の中で最もふざけたものは所謂歴史科學を奉ずる連中が唯物辨證法とかいふものによる研究だ。一般的に從來の考古學の說を否定するといふ看板であるが彼等が立論の材料とするところは大部分從來の考古學者の努力を失敬してゐるのだから好い氣なものである。そして要するに日本國の神代なるものも蒙昧野蠻時代で、共產

主義的で無政府主義的であつたといふ結論に導くやうに不徹底な論理を並べ立てるので、彼等が如何なる恐るべき意圖に支配されつゝあるかは指示するに及ばぬであらう。

稍や妥當な學問的考慮に終始しつゝありと認められ、一般インテリから支持されつゝある方面の學說にしてみたところで、土臺から天孫降臨の事實を信せぬ連中のことであるから所詮は一種の社會進化論的な考察以外には全くの盲目である。たとへば原始農業問題の如きにしてからが其れで、繩文式文化時代に既に農業存せりとか、いや日本の農耕起源は彌生式文化時代即ち金石併用時代または青銅器時代に在りとかいふ位ゐなことで、蒙古、西比利亞の新石器時代と親類つゞきとみられる繩文式文化と北支、南滿、朝鮮に流れる彌生式文化との二つの層に就て男と女の區別でもあるかの如く考へて無理な考證の整理に光陰を費したり、原日本人たるツングース族が滿蒙系の彌生式土器を残した國津神で、(或ひは天孫族も同族と見たり)又た印度支那族を主流とする南方系が代表的農耕民族で遙かに遅れて渡來し銅鐸を残

した連中なりとして此の印度支那族とツングース族とを鶴龜の如く並べて考へやうとしたりすることは、『學者』の樂みとしては結構なことであるが、そんな研究が將來いかに精密なる發達を遂げたところで、日本國民の主流の出自を知ることがは絶對不可能である。稻の原産地が印度支那方面にあつて其れが上古に於て黒潮に乗つて渡來した南方民族によつて我國へもたらされたであらうといふやうな學說には私共は反對せぬ。又た我國の神代期原史社會に於ては米は未だ一般的の食料でなく尊貴なもので、粟や稗が常食であつたといふやうなことにも異存はない。天上における天照大御神と稻との關係に就ての古傳とゴツチャにして考へて、天孫は南方海上より渡來されたといふやうな人たちは死後神界の實消息を知るに及んで、愕然として驚くであらう。いつも云ふことではあるが日本國民が混血民族であることを私どもは認めないわけではない。北方からも南方からも悠久な時代にわたつて幾千百回にもやつて來たのである。けれど突きつめて云へば其等の祖先も皆な地上に於て下等動物から進化したのでなく皆な天上から左遷的に地上へ下された謫仙的な高等生類

で、それが地上の生活物資不便極まる時代であつた爲め野蠻的な生活を営まねばならなかつたのである。然るに左遷的な意味でなく、地上經營または文化開發の使命を帯びて天降られた方々も地上各方面に幾回となくあつた。さうして最後に天上神界を公的に代表して地上統治のために天降られたのが天孫を中心とする大部隊の神々で、それが此の國土先住の野蠻的民族や國津神たちと次第に混血して今日に及んだもので、全國民の大部分は殆んど天孫御一行の靈を以て清祓せられ、『天孫民族』と稱し得られるやうになつたので、天孫御一行の降臨は比較的新しい時代に行はれたのである。さうした神祕的な大事件が比較的新しい時代に行はれたとは承服いたしかねるといふ人があるが、なせ時代が古ければ信じられ、時代が新しければ信じられないのであるか。キリストに關係した種々の神祕的大事件等も僅かに二千年前のことではないか、バビロン、印度、埃及あたりの五六千年もしくは其れ以上の文化と歴史的事實とに考へて、何となく信じられないといふのは、一種の理智的迷妄である。山中照道先生が堂々と昇天されたり、水位先生が神界へ肉親のまゝ出

入されたりしたのは何れも僅かに數十年前のことではないか。否、まだくゝ人の知らぬ斯うした事件は實は澤山にあるのだ。

古來日本米ほどの良質の米はどこにもない。日本人ほど米を常食にする民族も他にない。近ごろ外國米も改良されて殆ど内地米同様のものが出来るやうになつたが其れは近頃に行けることである。米と天意だけのことを考へても少しは物の道理がわかりさうなものである。神劍に關係ある鐵にしたところが其の通りで、諸外國が過程した石器時代——青銅器時代——鐵器時代のコースを我國では正常的に辿らず、石器から一躍鐵器へ行つたことは多くの學者も之れを認めてをるところで、そのことなども少し『天劍祕帖』の中へ書いておいた。

高天原の原地は或ひは新羅、任那の地域であらうとか、種々の習俗等の關係から南方の某所であつたらうとかの意見も、神界實消息の一部分を實知する吾々からみれば、馬鹿々々しくて問題にならぬ。

x

x

x

近年の考古學的發見は、種々の宿題を解決するには何の効驗もなく、ますます事態を複雑ならしめ、昨日に於ける定説らしいものは今日に於て覆されるといふ有様である。たとへばインダス河流域の古文明が發掘されてより五千年以上も古い華やかな文化の歴々たる證跡がメソポタミアのスメル文明に皮肉な微笑をあびせかけて居る。そこで假説の創作が使命であるところの學者たちはスメル人がインダス流域より渡來して原住民を征服しスメル諸都市を建設したのであらうなぞとも考へて居る。とにかく住居の構造、印章の彫刻、土器の優秀さ等からみれば五千年前に於けるインダス文明の方がバビロニアの其れよりも進んで居ることは否定出來ぬ。ニギノ尊を中心とする天孫降臨に先立つて、印度北部の平地から支那大陸へかけて活動された神人の啓導の消息が幾分でも明かにされない限り、種々の假説が生滅起没するのは當然であるべきである。それらのことに就ての愚見の一端は『神界の系統と地上文化の淵源』の中に述べる。

x

x

x

言靈の幸ふ國の日本語についても八釜しい研究が各方面の陣地に放列が布かれて激しい闘争が繰返されてゐる。日本語と朝鮮語との關係に就ては新井白石あたりが彼れ此れ言ひ出したのを始めとして、アストン、白鳥、金澤博士あたりの研究が相當に注意を惹いて居るが、さまで權威ある證明が成立されてゐない。日本語をウラル、アルタイ語に歸屬するものとする舊式の學説も、抑もアルダイ語なるものゝ成立にすら疑問符をつけられ出した今日では甚だ影のうすいものと申さねばなるまい。南方諸語系との關係だつて一部の人々が云ふやうに手ツ取り早く片づけ得られるものではない。

x

x

x

或る方面の人たちは、支那の古典の中に盛られたことを其のまゝ歴史的事實と信じて日本歴史の有らゆる起源を此の方面に持つて行かうとして居らるゝが、實際は神話的傳説に或る工作が加へられて整理されたもので、禹の洪水の話でつて世界共通の或る説話と同系のものであることは小川琢治博士なども云つて居らるゝ通りで

ある。大概の古傳は儒家の手によつて或る意圖により改竄されたり抹消されたりしたもので、我國の古史に傳へられた神々との關係も殆ど其の消息が窺ひ得られないまでになつてをる。馬鹿にされて儒家の工作を煩はさずに殘された先秦時代の文獻たる山海經や穆天子傳の中に却て古傳の面影がちらつてゐるので、今から二十數年前佐々木照山氏が穆天子傳の研究を半歲餘にわたつて讀賣新聞に連載したものと、學問的に價値の乏しかつたものであるにもせよ其の思ひつきは妙であつた。近頃歐洲諸國の支那學者等が支那古傳の再建築に骨折つてゐるさうであるが、神界の實消息を無視しての研究では、どうせ巧妙なる假説の藝術品が出来るだけのものであらう。

支那の古傳で重要な役目をつとめて居る龍に關する諸傳説についても、紅毛人の學者は西方傳來説や印度傳來説を主張して居る。又た其の本體を蛇とする考へや蜥蜴の長大なものであつたらうといふやうな考へが眞面目に取扱はれてをるが、つが

もねえ話である。

ニギノ尊の高千穗降臨とニギハヤヒノ尊の大和降臨とを同一説話の派生と考へたり、^{ヤマタノソコ}山田之曾富騰（久延毘古）は朝鮮の道路の標木神すなはち^{ヤマタ}八岐の^{ソコル}蘇塗ではないかと疑つたり、道臣命は實は男性ではなくて女巫であらうと考證したりするやうなことは、人の女房と自分の女房と何處か似たところがあれば同じものではないかと思ふほど風流な研究態度で吾々の如き武骨者の視野外の問題であるが、イザナギ、イザナミ二神が柱の周圍をめぐる傳へを、南方支那の原住民の間に春の季節祭として行はれる形式や印度のムンダ族が結婚式の折に樹木を植えた壇を男は右から女は左からめぐる習俗に關係があるものと推斷するやうなことは如何に研究とは云へ不謹慎極まることで、これは太古神法に關する極めて重祕の神傳が意匠的に我が皇典に傳へられて居るものである。我國の天地開闢に關する傳へが南方系の所謂創造型神話の影響したものと強辯するのも因果關係を顛倒した考へ方である。ヒ

コホホデミノ命が海中に鈎を求めに行かれる話がインドネシア諸島に行はれて居るとか、天岩戸神話は冬から春にかけての季節祭『笑ひの祭儀』の名残に勿體をつけたものと口走つたりする勢ひで行くと、或ひは將來天孫と木花咲耶姬命磐長姫命の間に行はれた傳へは、支那の古代に行はれたソロレートの片影だといふやうな説を唱へる人が出てこぬとも限るまい。(ソロレートといふのは家族に數人の姉妹があつた場合その全部が長女に結婚した者の妻となる制度)すなはち大山祇家にはソロレートの習慣があり天孫家では其れを嫌忌されたといふやうな學説を行ふものが出てこぬとも請合へぬが、近ごろの科學的研究なるものは神界の實消息と神祕の事情に盲目で蟹が其の甲羅に似せて穴を掘るやうな卑俗なもので、知らず識らず世の中に毒ガスを撒布しつゝあるのである。人心の惡化するのも尤も千萬である。考古學、比較言語學、人種學、神話學、古代社會學、民族學といふやうなものが其れ／＼の角度から古代史の研究に重要な役割を持つことに對しては吾々も敬意を拂ふものであるけれど、其の研究の根幹は如實に神界の實相を知り、顯幽兩界の關係を知るこ

とであらねばならぬ。高貴の神界の消息の問題は姑らくおき、普通の人靈の死後の生活状態と吾々との關係に就てだけでも多少の知識を有することが古代學に志す各方面の學徒の必要なる準備であるに拘らず、そんな非科學的なことは嚴正なる學問上許されないことだと思つてゐるらしいが、假りに歐米に於ける八十年來の所謂心靈科學の研究業績の大概だけでも冷靜に一瞥してみられてはどうかであるか。ろくすっぽ研究もせずに變態心理だ、迷妄だ、手品だと思向きもせず、いつまで枝葉の泡沫的學説の起滅にカードを整理して日を暮らして居らるゝのか。所謂心靈科學の研究には天文學者、物理學者、醫學者、心理學者、法律家、文藝家其他各方面の知名の學者が多年の嚴密な研究を遂げ來つてをるのである。一口に『精神作用だ』など言ひ消す人々は、電氣に關する知識を抹殺して今日の工業や戰術を論議する人々と何の區別があらう。

歐米流の心靈科學に就て大概の理解が出来て後、更らにそんな研究方法では及びもつかぬ高級の神祇界の消息に就て考慮の焦點を集中すべきである。これが現代の

人類に課せられた第一の正しい學問である。正則審神學の中興者とも云ふべき本田親徳先生が、明治の初年に於て學問を三大別し靈知學ヒヅリガク（神祇及び諸靈に關する學問）事知學コトシリガク（法制經濟歴史文學の類）物知學モノシリガク（博物學等の類）として靈知學を根本として力説されたことは今日からみても不當ではない。

我國の古言を一家の見を以て體系づけ、その立場から紀記を研究して居らるゝ人もあるが、其の斷定は如何にも合理的に見えつゝ甚だ事實に相違して居る。天孫降臨も南方渡來説で、大隅の南部を古代のワダツミノ國とし、薩摩の南部を吾田國とし、その吾田國の南海岸から天孫御一行は上陸されたものとして地圖まで挿入して説明して居らるゝが、天孫降臨については昭和六年の春『國家起源論の根本誤謬』と題して『古道』紙上に主張した通りの考へが私共の信念である。斯ういふ方面の人たちは天孫降臨と大國主命の國讓りの話は本來無關係で、後世或る政治的意圖によつて結びつけて編輯されたものと見て居る。南九州へ天孫が降臨されるのに出雲

の政權には關係なく、現に其後も長年月の間出雲方面の政權や祭祀等は天孫御統治の方面とは別に獨立して存在し、神武天皇以後に於て始めて出雲政權は大和政府に歸屬するに至つたものであるといふのである。これは今日に残されたるドキュメントに關する限り正常な判斷であるといはねばならぬ。けれどもいつも申す通り神界の實消息を無視して神代の古傳を彼れ此れ言擧げするほど亂暴な話はないのである。大國主神の國讓りに關する古傳と天孫降臨とに關する古傳との關係は我國の古典に記述するところ多少の訛傳こそあれ大體その通りなのであつて、主として幽ヨウ的テク史實なのである。我國における神代の記録は、口傳によつて編輯されたもので——或種の文書もありたらんも——幽界的史實と現界的史實とが經緯されてをるのであつて、それを總て現界的史實とみるか然らざれば或る意味に於ける『説話』または廣き意味に於ける單なる神話としてみるか、といふ風な態度でいくら研究したつて土臺から目鼻のつくものではないのである。大國主といふのは山陰方面に居住した豪族の首長の代名詞で何十代もあつたので大國主と名乗つた英雄は何百人あつたか知

れんといふやうな考への學者が多いやうだが、てんで神界の實消息がわからないのだから眞面目に話が出来ない。今から二千數百年前に現界から神界に入られた或る大神仙（特に名は祕す）が日々の如く修される神法の中に九柱の神に感合の祕辭といふのがあつたが、その九柱の神といふのは我が古典に明記された誰れも知る代表的大神で、その大部分は宇宙根本造化の神々であるが（多くの學者は造化的大神は後世人のさかしらに製造したもので人格的存在の實神に非すと妄言するけれど）其の神たちの中の一柱は大國主神である。私があまり具體的に詳説し得ないのは神祕をあばく咎めを受くることにはモウこりこりして居るからで、あやふやなことをいふのではない。崇神朝にヒカトベ（丹波の女王）の小兒によつて託宣された神歌の如きも出雲振根誅戮後それに關聯した事件のやうに古典には編み込まれて居るが、これは豊受姫神のミタマシロに關する啓示が色々の事件に混雜して傳へられて古典編輯當事者を惱ませた揚句あんなことになつたので、斯ういふ例は記紀にも風土記にも極めて多い。此のことに就ては大正十五年八月十四日の神示によつて昭和二年

一月の『古道』紙上『天行居夜話、其六』にも少し書いておいたつもりである。）とにかく如何なる學者が如何なる方面から研究するにもせよ、神典を讀むには先づ神典を讀むべき正確なる視力を吟味することが必要で、幽界的史實と現界的史實との實在と其の混雜交渉とに就て安正なる認識につとめざる限り、一切遊戯である。

神武東征に就ての研究も吾々とは大いに考へ方を異にして居る。さういふことに就ても少々『天劍祕帖』の中に書いておいた。走水の遺跡などのこともさうで、海上暴風雨等の場合或る人が一身を犠牲にして一行の無難を祈るといふやうなことは佛教渡來後のことで、日本武尊時代の日本にそんな思想の痕跡は絶無で（神武東征の折の紀州沖のことなどは別の意味）あるから此れは後世の何かの話が反映して傳へられたものであつて、オトタチバナ姫入水に關する消息を其のまゝ史實として取扱ふことは百パーセント滑稽であるといふのであるが、これなども一應は尤もな研究であるけれど、疑へば際限がない。元來軍旅に女性を伴はれるといふことが正當に考へられず若し其れを伴はれるとすれば其れは上古の風習としてオトタチバナ姫

は女巫であつたらうと考へる人もあるやうだが、軍旅に意義ある靈感的な女性であつたとすれば尙更ら或る神異的動機から入水せられたことはあり得ることである。更らに又た俗な考へではあるが、先達ての滿洲事變の折にも大阪師團の或る青年士官夫人が良人の出征の際に自殺して勵ましたことが新聞紙上に傳へられたが斯かる思想は木村長門の戀女房以來始まつたことではなく、日本婦人の壯烈なる徳性の一方面で、古來から我神洲相傳のものであり、そんな空氣の中にオトタチバナ姫入水の事件があつたと考へても、その美はしく壯烈なる遺風は我民族に強力な感激を永久に與えるものであることは申す迄もない。或種の勝手なる假想から片ツ端から古傳にケチをつけることを所謂科學的研究の手際のやうに考へて此頃の學風は誠に以て慨嘆の至りである。

更らに由々しきは熱田神宮祭祀の神劍は三種の神器の一たる叢雲神劍に非ずといふ説が、ひそかに近頃或筋に於ても有力に考へられ始めたといふことである。斯ういふ説を唱へる學者は、『熱田神宮に奉齋してあるクサナギノ劍は伊勢神宮の貴重品

の一たる寶劍ではあつたらうが神器ではないから倭姫命も之を日本武尊に授けまゐらせたのであらう。假に此皇子が天皇の御代理として重大任務に就かせらるゝに當り神器を帶同せられたことがあり得たとしても皇子の薨去後直ちに大神宮に回收せられた筈で、之を閑却し、後日に其の遺留地熱田に祭祀したとは考へられぬ。——然らば天叢雲劍は尙依然として伊勢神宮に奉安せられて居る筈であるのに我々國民が之を耳にせざる理由は如何と訝るものもあらうが、其の説明は容易である。中世以降熱田にある草薙劍を天璽なりとする説が一般に盲信せられたので、眞物は却て閑却せられたのみならず天孫が高天原から帶同せられたものとすれば久しい歲月の間には其の材質が何であらうとも原形を留めぬまでに腐蝕した筈であるから自から烏有に歸したこともあり得る。云々』と主張するのである。又た文學博士〇〇〇〇氏は度會氏延喜の本系帳や外宮禰宜補任次第等によつて、度會氏の遠祖大若子命が、垂仁天皇の御代、越國の荒振る兇賊阿彥を平定せん爲め皇命によりシルシノツルギクサナギ(標劍)を賜つて出向し功を奏して復命し後ち外宮に於て其の標劍神を祀つて草奈伎

神社と稱し、攝社の第一に置いたことがあつて、所謂草薙劍なるものも或る特定の一種に限らなかつたことを思はしめる云々と公表し、暗に熱田神宮の神儀の尊嚴を消極的に解釋せしめむとせらるゝやに疑はるゝ口吻を洩らして居られる。このことに就ても本年五月廿七日發行せる『天劍祕帖』に一寸論及しておいた。(『天劍祕帖』は主として石上神宮に關することに就て書いたのであるが。)

天璽たる叢雲劍を如何なるわけで倭姫命が皇子へ授けまゐらせられしか、斯かる重祕無比のものを何故に日本武尊がミヤズ姫のもとに置いておかれたか、又た其後に於て何故に伊勢神宮へ還御の運びに至らなかつたかといふことに就ては吾々如き草間の窮措大が彼れ此れ詮議めきたる言擧げは畏れ多いことであり、又たそんなことを猥りに公刊物などに書くべき筋のものでもないから差控へるが、天孫降臨時代より地上にある天璽が烏有に歸した筈と云へば畏れながら伊勢に齋き奉る天鏡の儀にも考へ及ぶわけになるが、われ／＼は只だ『そんなことは御心配に及びますまい。』と一言しておけばよい。又た假りに此派の學者たちの考へるやうに、記紀の紀

年法に五六百年のかけ値があるものとし、神武紀元は實際約二千年前とし、天孫降臨は二千數百年前として現實的に考へるとしても、其頃からの鐵劍(我國の上古に銅劍もあれど鐵劍が主で銅劍の次ぎに鐵劍が出来たといふ學說の誤謬は『天劍祕帖』の中でも論じて置いた。)や白銅鏡の如きが今日影も姿もないとは考古學者も認めないところである。又た鐵材や銅材の什器でも幽神界に存在する間は何千年經過しても變化しないもので、それが或る手續を経て純然たる現界的存在となれば普通の物理學的法則を受けて鏽化もすれば風化もすること地上普通の物品と異るところなきが普通である。(異例も絶無ではないが。)それで悠久の時代から存する天上將來の金屬質材の寶器なども地上に於ける現状は大概神武時代の御物の如くに拜せられるのが普通で、もちろん相應の風化鏽化はあるが既に烏有に歸したなど云ふことはない。これは只だ想像や假説でなく、少々わけあつて確言するのである。又た天璽たる叢雲劍が伊勢神宮に奉安してあるならば何故に其れに關する神事や記録が今日に残らないのであるか。何等積極的の證據もないのに苟くも我が國體に關する重大事件を

あれば何も彼も盲信するといふやうな甘ツたるい人でなく、又た學校で講義せられるばかりの世間ばなれのした學究でもなく辯護士として世の中の複雑な葛藤にも普通人以上に冷靜綿密なる批判力を有せられる人であるが、さて斯ういふ問題となつてくると、どうもまだ好人物であることがわかる。古史典の考察といった風な問題のみならず最新の科學、たとへば天文學とか地質學とか醫學とかいつたやうな方面に對しても一寸普通人では思ひ及ばぬことでシカモ専門學者でもあたまを傾けるやうな説を無學な靈媒が堂々と系統づけて最新の學語を使用して解説したりするもので、大概の人たちは參つて了ふものであるが、それが決して高貴の神でもなく、又た統制ある正神界の使神たちでもないので、審神者としての修行は實は容易のことでないのである。(サニハは沙庭といふ意味で元來神憑り修行の齋場の名であるが審神者をもサニハとして通用するやうになつた。)併し高窪博士の志の存するところと其の態度とに對しては吾々は謹んで敬意を表するものである。われ／＼は人のすることを斥けて吾々のすることだけを唯一無二の正しいものとするわけではない。吾

々の考への内容については既刊『古神道秘説』及び『神界の經綸と天行居の出現』等を精讀せられんことを希望する。(いづれも山口縣熊毛郡田布施局區内石城山、神道天行居で發賣して居る。)又た此れは餘談であるが高窪博士が我國の片假名は漢字の偏から取つたり略字省劃等から出來たといふ通説を排して神代文字から段々改良されて出來たものと主張せられるのは感心いたしかねる。高窪博士のやうなことを言うた人は徳川時代にもあつたやうに記憶するが、われ／＼は片假名は漢字から生れたものと思ふ。そんなことは日本國が神國中の神國であるといふ理由を少しも傷けるものではない。その他の文化文物も大部分海外から輸入したものである。海外淵源の文化文物も根本は天上將來のものであること多年言ふところの如くである。

×

×

×

古事記の性質、日本紀の性質、及び其れを研究する資料ともなるべき拾遺や舊事紀や風土記や其他二三の貴重なる古文獻の學的價值については最近二十年間縦横に研究されて世人周知のことであるから今それらのことについて一言することは避け

る。古語拾遺の割註が後人の記入にかゝるものとするやうな説は成る程とも思はれるが、古事記が實は僞書であつて平安朝初期の述作であらうといふやうな研究は固より承服できぬ。いつも云ふ通り同じく勅撰の國史としても記紀は其の性質を異にし、又た記紀ともに僅かに千二百年前の編脩なので、神代の古傳を逸するところすくなからず又た訛傳や脩飾や色々のものも混和して居て記紀にあるところを一字一句信用出來ぬと同時に記紀に無いことを必ず否定し得られざるものであるけれど、比較的神界の實相と合符せるところ多きを以て地上無比の尊重すべき古典として、皇典とも神典とも崇めて頂禮すべき理由は萬古動かせないのである。それにつけても今から二十餘年前、周防國吉敷郡秋穂二島村戒定院といふ眞言宗の山寺の住職平原隆法といふ仁が祕藏して居た『古事記釋』十卷を貸して貰つたとき何故に要所だけでも寫しておかなかつたか残念でたまらない。北畠親房の元々集に引いて居る此の『古事記釋』は中央の學徒が血眼で搜して居るけれど一紙だに發見し得ざるもので、今では戒定院にも見當らず全く所在不明となつて了つた。

x

x

x

上代の社會組織は同一血族に屬する人々の民族的集團か又は特殊業務に従事する人々より成る部族集團を單位とし個人的生活といふものが絶対に許されなかつたから個人的祭祀といふものはあり得ずといふやうな意見に對しても私どもは抗議をもつて居る。一氏族一部族の共同祭祀と同時に個人的な祭祀も太古以來存在したのである。人智が進み所有慾が發達して共産的社會制度を厭ふ氣運が勃興するに伴ひ信仰も亦た社會的見地から漸次個人的見地に移つたといふやうな學說も海外諸國の古代法制等を研究した人々の先入主となつた知識が邪魔して一つのイリュージョンに馬鹿にされて居るのである。我國の上古社會は必ずしも共産的でなかつた。個人の所有も認められ個人的な信仰祭祀もあつた。併し近頃の國家社會主義學說の一面の健全な方面が上古に實行されて居たらしいことも認め得られる。琉球や東北の山村に共産的遺風が存して居ることも事實であらう。古文献の上からでも左うした風習の一面を考察し得られる點もある。併し其れは個人的生活や個人的信仰が併存した

事實を打消す理由にはならぬ。個人的信仰の存在を實證する一つの有力なる材料は太古神法の内容検討によつて明確に發見し居られる。

x
x
x
伏見稻荷神社の淵源は蕃別の一氏族の私祭神であつたのを弘法大師が東寺の守護神として奉齋してから有名になり、京の祇園社は本來日吉神社の一末社で、感神院と稱して牛頭天王などを祭つて居たものを八坂神社と改稱しスサノヲノ尊を祭神として此れも官幣社となつた。斯ういふ風の例は中古以來他にも澤山にあるが、これをどういふ風にみるべきであるかといふやうなことを考へてゐる人もあるらしいが、苟くも勅命によつて祭神や祭祀法が正しく改まつて官幣社となつてゐる神社は今更ら申すまでもなく正神界の統制内にある尊貴の神社である。くだらぬ學究の所説に惑はれないやうに希望する。平野や大三島の神達をウヰツベラな研究から只だ外來神として排斥せんとし、或ひは今日官幣にあづかつて居る神社をも内容をしらべて宗教的神社と民族的神社とに區別する必要があるなどと唱道する學者もあるが、いか

なる民族的神社も宗教的神社にあらざる無しである。又たそれが正しいことである。畏れながら伊勢神宮に對し奉りて一營利會社が事業の御守護を祈願したからとて其の會社事業が正しいものである限り少しも不都合は無い。御神徳は廣大無邊である。

x
x
x
併し如何に高貴の大神の名を列べ立て、祭つて居ても、事實上キツネやタヌキや僧侶山伏等の靈が活動して靈異を示して居るところの神社や教會神道の類ひが、人間社會を冒瀆するものであることは今更申す迄もなきことで、それらに就ては吾等が多年排斥非難しつゝあるところである。公然キツネの靈などが活動しつゝあることを自他ともに承知しつゝも、それを神として尊崇するものは死後必ず其の因縁に引かれてろくなことはないこと多年力説し來れるところであるが、世の中は斯ういふ方面の問題には案外にも無知無識であつて、取敢ず何か目前に奇驗があれば其れを神祇として拜むことを少しも怪まないのは呆れ果てたことである。又た左ういふ

どころのカミサマでも仁義道徳を説いたり潔癖であつたりする場合が多いが、それ
をみて直ちに其れを立派な神靈であればこそと妄信する者があるが、沙汰の限りで
ある。妖靈邪鬼の徒でも正神を装ふことに全精根をつくして居るもので、それに乗
せられる人間が相變らず多いのは慨すべきことである。神道△△教の幹部などでも
左ういふ弊害は百も二百も承知しながら財政上の都合や教勢維持のために其の舊態
を改めず、監督官廳も少しも注意しないのは白日下の奇怪事である。近來政府も敬
神思想の普及に努力するやうであるが、一面に於て斯かる邪鬼妖靈の跳躍すること
を根本的に叩きつぶす勇斷無き限り、利弊は相伴うて出現し、却て識者をして神道
なるものを嫌忌せしめる風を助長するかも知れぬ。神異事實の活動を厭ふのではな
い。その正邪の審査を嚴かにせよと云ふのである。

正神界の神祇が奇驗をあらはし給ふものならば今年の如く西日本は五十年來の大
旱魃で蒼生は弱り切つて居るのに何故に靈徳をくだし給はぬのであるか、昔支那で

或人が、雨乞して雨の降るのはどういふものかと問うたら或るモノシリが、それは
雨乞せずして雨の降るのと同じことぢやと答へた、やはり左ういふもので要するに
雨乞なんてものは所謂迷信であらうと考へる人があるかも知れん。雨乞して雨の降
るのは天之正命である。雨乞して雨の降らざることあるも亦た天之正命である。人
間としては人事を盡すべきであり、大砲の射撃も可、雨乞の祭典神事等も可なりで
ある。天の攝理は遠大であつて、視野短小なる私どもの理窟だけで彼れ此れ言へる
ものでない。雨乞の神事修法等もいろ／＼あるが、それが必ず應ありとは云へぬ。
そのわけは種々あるが大正十四年四月増補再版『幽冥界研究資料』第二八九、二九
〇頁日向國諸縣郡速水神社に關する記事等も参考せられたい。雨乞に限らず其他の
神事修法等の應驗に就てもこれらのことから類推して種々の場合のあることを考へ
られたい。そして節操ある不動の信念ある人に非ざれば、いかなる神法道術を語る
も無駄である。十數年來同じことばかり繰返して言つてるのに、同志中にも未だに
眞に腹入りのせぬ人があるのは私の説明に缺陷があるのか残念千萬である。

× × ×
わが國の神典を普通の理論的研究の態度で考へることは根本から誤りである。實は千二百年前記紀編脩當時すでに當局學者の間に其の弊があつた爲めに餘りに奇怪に見えた傳へは殆ど削られ、ことさらに話の辻褄を合せるやうに努力した爲め大いに古意を損したが、それでも古傳の大概は甚だしく傷けられずに傳へられて地上文献の至寶となつたのであるが、それを更らに又た歐米に行はれる古代史研究の方法等を以て勝手にときはぐして行つては古義の模様は消えて行くばかりである。閑談を一つ。

明治十年頃宮地水位先生が堀秀成翁と阿波國で面會せられたとき小松島で神道の講演會を開かれたことがある。そのとき水位先生はまだ三十歳足らずの青年、堀翁は六十歳位であつたが其の二人が講師であつた。(堀秀成翁は下總國古河の人、富樫廣蔭の門人で制度の學を修め特に音韻言語の學に長じ著書百有餘部あり、伊勢神宮の學館にも教鞭をとられしことあり。)うす暗いランプに照らされた會場で、盛んに

に神界に出入して居られた時代の青年神道家水位先生と雄辯自在の堀翁との登場は面白い對照であつた。その時に堀翁は議論と實際とは大いに異るといふことを講演されたのであるが、水位先生は大いに感服せられて其の要旨を直ちに筆記されようとした。年少でこそあれ既に其頃多數の門人もあつた水位先生として同じ講師として壇に立たれながら他の講師の説を筆記しようと思はれたといふことは水位先生の謙虛無我な美はしい性格がよくあらはれて居るやうである。然るに堀翁は其れをみて、それはやめたまへ、私が昨年八月二十八日永井從五位殿の邸に於て今日の話と同じことを講演し其時の考録が此處にあるから進呈することゝで數葉の冊子を水位先生が貰ひ受けられた。その要點を次ぎに抄出する。

凡そ議論を先にする者は實際に後る、議論を主とする者は打聞きては高尚に似たるも猶死物たるを免れず、實際を主とする者は高尚なるところはなくとも活物なり、然れば議論と實際とは死活の違ひある如し、然れども其の議論よく實際に施すによろしきあり、又た議論上にては宜しきに似て實際に施す能はざるあり、英

人は實際を先とし佛人は議論を先とすと云ふ、今や日本にも學者論といふものありて實用に甚だ迂遠なる論あり、たとへば信玄謙信兩將の如きは甲越兩流兵學の模範となるも雖も確く格を守りて實効に於ては織田豐富兩公の下に相列ることだに難し、此の兩公の如きは其の戦法を取て兵家の範則と爲すこと無しと雖も機に應ずるの妙に至りては他に比すべきもの無し、然れば武田上杉の戦法は死物に近く織田豐富二公の戦法は最も活物と云ふべし、議論の理に適へるも實際の用に適ひ難き此類なるべし、猶云はゞ世に行はるゝ西洋畫といふものゝ甚だ眞に適へる如きも見るまゝに活機を生ずるの味はあらず、東洋の文人畫の如きものは打見ては異體にして怪物を描ける如きものながら見るまゝに活機を生じ筆力の顯はれて自然の眞味を呈露するの域に至るものなり、彼の西洋畫は議論に比すべく、東洋畫は實用に比すべし、すべて議論に走るものは遂に偏僻に落る失なきこと能はず、宋の孫甫に或人名硯を贈る、其值千金と云、孫甫云、此硯何を以て千金の値ありや、或人答、此硯は墨を磨んとして息を以て呵すれば水流るゝなりと、孫甫

云、硯一日に一擔の水を盡すとも水の價何か有らんと云へり、これ然るべき言には聞えたれど然云ふときは文房具を感玩する雅味と云ふものなく風情といふものも失せて只だ偏僻なるものとのみなれるをや、茲に取降したることながら一の物語あり、元祿の頃市川海老藏澤村宗十郎といふ名だたる俳優あり、或時大佛供養といふ狂言を爲さんとて海老藏は悪七兵衛景清の役、宗十郎は畠山重忠の役と定まる、然るに其狂言の稽古の間悪七兵衛景清は衆徒の姿となり長刀を搔ひ込みて重忠の幕の前を通りて花道まで至るところを重忠聲をかけて景清待てといふところを宗十郎重忠になりて景清待てと聲をかくるに其氣合眞を得ずとて海老藏の意に適はず、それにては景清の驚きて振り向く調子が出ずとて數日同じところを稽古すれども折合はずして遂に初日となる、樂屋の人々も甚だ心配したれどもやむことを得ずしてその幕となる、然るに景清は花道を過ぎて小幕の前に近づけども重忠は聲をかけず、間合度を過ぎたれば俳優の仲間も更にも云はず見物も不審に思ひ居たり、景清今は爲方なく小幕の内に入りたるところを思ひがけず景清待

てと聲をかけられて實に驚き小幕より半身をあらはして重忠の方を睨みたるが、設けたる狂言にはあらずて實事となりたれば見物の人々も其の氣合に感じて其狂言大いに當りて盛んなりしと云ふ、彼重忠の宗十郎、景清の海老藏互ひに言ひ合せて業を合せたらんには其度はよく節に適ひてあるべけれど此實事には遠くして死物なるを其度を放したるところより却て實に至りて活物とはなれるなり、議論のよく條理に合へるも却て死物になること多きは此等の事にて思ひ知るべし、議論と實際とを死活に比して如此並べたるは他ならず、議論書といふものと我が神典とを合せ言はんが爲めなり、然るは議論書といふものは打見ては宜しく道理にも適ひたるやうなるを神典と云ふものは甚だ幼なく道理にも適はぬ事も雜るやうに見ゆるものなり、然れども議論書は其の書ける人の見識を規とし、つとめて道理に適ふやう書けるを、神典は神代より傳はり來りし故事を在りのまゝに、人智を以て慮るときは道理に適はぬやうに一應思はるゝ事をも記者の意を放れて傳はりたる事實のまゝに記したるものなれば人智を以てみるときは甚だ不審しく見ゆべし。

る事のあるが、やがて凡人の心もて記せるものならざる明證なりかし、其の幼なく見ゆるどころ却て活物たる所以なるぞかし、又た道理に適はぬ如く覺ゆるも小なる人智を以て然思はるゝ迄にて深幽なる神理を究めて見むには今日顯明の上に於て道理に適はざる如く見ゆるものは顯明に相反したる幽冥中の道理に適へるものなるぞ、明かに顯幽の分を辨へ然して其の大活眼を開きてこそ我神典は見るべきものなれ、然れども此等のことは簡單につくし難きことなれば席を重ねて述べし。

×

×

×

心靈科學を奉ずる人たちは、人間の肉體の内に超物質的エーテル體を有し、そのエーテル體は詳しく云へば幽體、靈體、本體の三つに大別し得られるといふが其れは何れも幽體の變化で此れを幽體と呼び靈體と稱するも差支なく、死後は生前の功德相應に又た過去世累計の決算相應の體を得るもので此れを玄胎といふこと從來屢説の通りである。又た人間の置かるゝ環境も四大別し得られ物質界、幽界、靈界、

神界が其れであるといふが、これも一つの見方で必ずしも排斥しないが、これも心
靈感度の差による假定に過ぎぬ。總括的に幽界とも靈界とも稱呼して差支なく、下
等な靈界を除いて云ふ場合は神界とも幽真界とも神幽界とも云うて不都合はない。
尤も縦にも横にも立體的にも幾百千の差等あることは此れも多年屢説の通りであ
る。

各自の靈魂が靈界居住者の分靈であるといふことも云ひ得られないこともないが
無理な云ひ方である。それも段階的に奥には奥があつて高級の自然靈が人類の遠祖
であるといふやうなことは歐米流の靈界通信を綜合した考へで、人類の進化過程は
大體胎兒の十ヶ月間進化過程と同様だといふやうなことは舊式の進化論と妥協した
低級靈の云ふ出鱈目である。淺野和三郎氏の如き我國に於ける此方面の代表的な人
がこの假説を以て臨めば天孫降臨の神事の如きも初めて立派に合理化すると云つて
居られるのは、此の歐米流の心靈科學なるものが如何に高級神界の消息を知る能力
に絶望的であるかを暴露したもので其他のことも推して知るべしである。

人間の祖先と猿の祖先が同一でないといふ所謂差別的進化論なるものは此派の仲間
としては左ういふより外に見解の施しやうのないことである。神といふものを大體
に於て四大別しての考へ方は先づ吾々の考へと差違はないやうであるが、佛教の諸
菩薩や基督教の天使等と同等のものとして天照大御神をも見奉らんとし、第二義の
神なりとするは甚だしき邪見である。彼等の所謂無限絶對獨一的實在の第一義の神
すなはち日本で云ふ天之御中主神と天照大御神との關係は第一義の神と第二義の神
との關係ではない。固より同神異名ではなく別個の神であるけれど、宇宙意識の最
高表現としてあれませる人格的存在の大神で、天照大御神は大千世界至高の大神で
ある。神界機關統制上の便宜のため、かつては人間世界に極めて親近して降臨あら
せられたこともあり、現に地の神界中府たる神集岳の大永宮に大坐しては宇宙根本
神界主宰の代命神の如くに拜せられるけれど實質的に其の御神徳は天之御中主神と
高下大小の差無く、地の世界顯幽一切生類より仰ぐとき宇宙至高の大神であらせら
れるのであつて、キリスト教の天使なごいふものと同階級の神靈ではないのである。

天照大御神の御神徳の中にも愛の方面や義の方面がある、愛や義があるなら絶対とは云はれないと申されるけれど開合變化の道理のわからぬ舊式の哲學にこだわつて居る人たちの頭腦は如何にも不自由に出来て居るやうである。ちかごろ歐米諸國に於ける心靈現象に於ても次第に太陽神並びに太陽神界の認識が八釜しく云はれだしたさうであるが、モウそろく時節が時節であるから正神界消息の髣髴位は斯ういふ方面からも多少認めて貰はねば、石城山の微力な團體だけでイキリ立つて居ても事は容易であるまい。所謂各人の守護靈の問題等も此派の人たちの云ふところと吾々の知るところとは一致してをらぬが、私どもはそんな問題で議論するやうな氣樂な立場にも居らず又た不必要のことで人の氣に入らぬことは言ひたくない。とにかく多くの事業には大概利害相伴ふもので、我國に於ける所謂心靈科學を奉せられる人たちの努力にも誤つた點があるにもせよ神靈の實在を此頃のインテリに知らせる基礎工作として意義ある努力であるから、さういふ方面の人たちに對しても充分な理解と敬意とを表すべきであらう。天行居の人たちは、よそから惡罵を浴せかけ

られても一々それに相手になつて應答せねばならぬほど几帳面でなくても宜しい。此方面の人たちにもせよ又た他の神道學者の方面にもせよ他の神道團體にもせよ天行居を嘲笑しながら年々次第に目立たぬやうに少しづつ變説改論して天行居の主張に或る程度まで接近せられつゝある事實に就ては、私どもは各方面の請先生の雅量に對して尊敬して居るものである。

x

x

x

先達て或人が來訪されて罪の無い世間咄の末に支那の紅卍教の話が出て、靈媒が砂へ文字を書く方法等について語られたが、實は此れは何も新しい發見ではないので、随分昔から色々やつて來た低級な交靈方式の一種なのである。諸書に散見する乩といふのが其れである。盤に砂を盛り、上に丁字形に似た架を置き、錐を其の兩端にかけ、左右兩人これを扶け持つに神降れば則ちこれに憑つて沙に書きて人に吉凶を示すといふので俗に扶乩ともいふとある。コツクリさんとかプランセットとかいふものと同様のもので、その形式を少し神々しく見せかけるやうに紅卍教あた

りで工夫してゐるだけのもので、正しい神法道術を志とするもの、接近すべきものではない。趙吉士の『寄園寄所寄』だの伯虎の『唐伯虎紀事』だのには凡に憑つて種々の靈が活動し、其の作詩なども何れも面白いけれど、斯ういふものに歸命するやうになるとろくなことはないのである。趙吉士が康熙癸酉の秋、二三子とともに符を焚くに凡ち動いて自から煙霞隱者と署す、日夜を積みて著すところの詩文甚だ富む、隱者、胡子鹿亭に囑して代つて壁に書せしむるに字字清新、絶えて烟火の氣無し、その姓名を詢ふに言はんとしてまた止むこと再三、胡子度みて求む、復た茗柯の二字を書す、知んぬ茗溪凌忠愍公なりしことを……など書いた引を附して煙霞隱者の詩を集めたものなごあるが、さういふものが果してどういふ靈の爲すところであるかは今此處には言はぬ。支那の昔のことを云ふのではない、近來の色々の憑靈現象に戒むるところあらんが爲めに一言したのである。

道俗ともに正人吉士は奇福を求むべきものではない。求めずして獲るところのもの

のは天之正命である。升菴集か何かに『奇福あるもの必ず奇禍あり』と云つたのは多少此處に言ふところは意味は異なるにもせよ大概の道理あることである。『天行林』の卷末にも『深山寶あり寶を意はざるもの此れを得』といふやうなことも書いたやうに思ふ。みだりに奇福を求めたり、又た或る便宜によつて神仙祕するところのものを正當の手續無くして手に入れて人に言ひふらしたりする輩は早晩ろくなことはないのである。天縁無くして似て非なる手續によつて獲たものを天縁と自惚れるやうなことは危険なことではない。又たいつもいふことだが『黙る力』の無いものは吾黨の人でない。

犬といふものは萬人たいいてこれを好くが私も犬は子供の時から好きである。先月も土佐の或人から土佐犬の子を送つてやらうかといふ手紙が来て大いに歓迎したかつたが女兒どもが反對するので残念ながらおことはりしたやうな次第だつた。犬といふものは、鼠の如く梁上君子の智慧を氣取らんとせず、猫の如く座敷の上でちりめん座蒲團に鎮坐せんとする欲望も無く、愚と貧とを守つて黙々として生涯を

断送する。そこに犬の馬鹿げたところと尊いところがある。

今この書きものをしてる時、裏の方で女中同志で水のかけ合ひをして騒いでる聲が聞える。家がせまいので近所近邊の騒音は何も彼も聞えてくる。始めにどつちが水をかけたのかどつちが悪いのか其れを言ひ争ひつゝ、尙ほも水をかけ合つて居る。どちらか一回だけ負けて居れば其れで其の喧嘩は永久に解消するのだが、兩方で『最後に水をかける』勝利を得るために加際限なく其れを言ひ争ひつゝ、騒いで居る。

世の中のことは大概これだ。一つだけ負けてをれば済むことを負ける勇氣無きためにいつまでも修羅を燃やして居る。自分の影法師と角力を取つてるやうなもので、そのために日に夜に『天國』を『地獄』にして居る。實に僅かなことだが只此の『一つだけ負ける勇氣』があれば、殆んど天下無敵だ。

天行居では『何も彼も神ながら』といふが此のことは深思して充分に手に入れん

と、その眞味を味ふことは出来まい。これは堀天龍齋先生から聞いた話であるが、先生が人間生活のつれづれのまゝに一時禪に遊んで居られた頃のこと。先生は峩山和尚と親交があつたから峩山の師匠の滴水の室にも出入せられた。(滴水和尚が喜壽の時に書いたものを先生から送り越されたこともある。)その滴水の棒喝を受けた人に或る裁判官が居て或時滴水老漢に質問した。『宮内省が此の林丘寺の御手當金を廢止したらどうなさるか。』林丘寺は寺格がよいので毎年若干の金が貰はれたので其の金が和尚の生活費にもなつて居た。和尚は『其時は托鉢をするさ。』とのこと。その裁判官の學人は重ねて『托鉢をすることもならぬと宮内省から命令があつたらどうなさる。』『その時は死ぬまでのことぢやがな。』滴水和尚はナゼそんなことを聞くのか不審さうに其の裁判官の顔を眺めて居たといふことである。『何も彼も神ながら』も此處まで來なければ嘘だらう。

此頃の管長さんやお師家さんは口頭では實にえらいもんだが、果して此の滴水老漢ほどの眞の覺悟が出來て居るかどうか、新聞紙上あたりで拜察するところでは少

々ごうかと思はれる。吾々古神道を奉ずるものは大悟大徹なんてものを追ひ廻す必要はない、日常卑近のことで足實地を踏み『何も彼も神ながら』を修證すべきである。何も彼も神ながらといふことについて誤解があつてはならぬが、そのことは今春刊行した『一心傳』の第四十九章に書いておいた。

『一心傳』第三十九章は少々語句が過激ではないかど注意してくれた人がある。なるほど左う聞いてみると少し言葉が荒ッぽいやうである。次ぎの如く訂正してはごうであらう。

抜けがけの功名的のことは慢心の産物にて神の嫌ひ給ふものなり。天行居の統制を尊重し、各自の餘力を最も効果的に行使せらるゝ爲めに、常に本部の統制に關して考慮ありたし。

敬神尊皇は天行居のみによつて唱へらるゝものではないといふことを何の意味か

近ごろ力強く云ふ人があることを耳にした。其人は佛教の信者である。固より然りで吾々天行居同志は敬神尊皇は全國民それ〴〵の立場から言行しつゝあるものなることを認めて居るし、天行居のみによつて敬神尊皇が唱へられるといふやうなキチガヒじみたことは未だ曾て一度も云つたことはない。併し今更らそんなことを言はれてみると、吾々も一言したくなる。これは『一つだけ負ける勇氣』に囚はれないでよからう。

佛教では四恩を説く、その一つは國王の恩である。弘法大師は、たとひ父母がわれ〴〵を産んでくれても、もし國王がなかつたならば、國は亂れ強者は弱者を脅かし、貴賤互に劫奪して身の安全を保つことは出来ぬ。また財産を保持することも出来ぬ。實に國民の居住を安全にし、經濟を安定し、天下を平和にし、この世を榮えしめ、後世の子孫をしてこれを讃頌歡喜せしめるものは偏に國王である。

と説いて居る。これは眞言宗に限らず佛教各宗の通説で、われ〴〵も一應至極同感

である。けれども吾々古道を奉ずるものゝ考へは少しちがふ。われ／＼の確信するところによれば日本國民の尊皇心は、『恩を受けるから其れに報せねばならぬ』といふやうな取引的な打算的な動機によるものではない。皇恩の洪大無邊なることは筆舌を以て盡し得られるものでなく、それは地上生類が太陽の惠澤を受けて居ることと同じことで、あまりに洪大であつて言議することの出来ぬものである。けれども日本國民の尊皇心は皇恩の認識といふやうなことは超越して、取引的でなく打算的でなく、絶對的なのである。奉公人が主人の恩愛を受けたから特に忠勤を勵むといふやうなことゝは全然わけがちがふ。これは重大なことであるから少くとも天行居同志諸君だけでも克く腹に入れておいて頂かねばならぬ。

トルストイは創造者としての神を排斥したが、なんぼう排斥しても創造者は創造者である。その創造者の權威と榮光を代表して人體を以て地上人間社會に臨み給へるもの即ち是れ日本天皇である。何を以て之れを證明し得る乎、天行居發行『古神道祕説』と『神界の經綸と天行居の出現』は其の質問に應答せん爲めに書かれたものである。

のである。

天行居によつて明らかにせられつゝある神界の實相を目標とする大信仰の下に、世界の諸宗教は各々地方的民族的に存在の意義があるものと思ふ。われ／＼は諸々の宗教に對して反感をもつやうなケチな考へは毛頭無い。けれども正しい神界の實相が次第に明瞭になるにつれて、諸宗教は多少氣色が變つてくるか、或ひは自然的に解消するものもあるかも知れぬ。

神界の實相といふことを天行居で常に云ふが、それは古人が道樂半分に書いたものを馬鹿正直に妄信してゐるのではないかといふ人がある。たとへば海上または海中の神仙境を支那で傳へたのは蜃氣樓であるといふのである。山東省の海邊に現はれる蜃氣樓が仙境として詩にも繪にもなつた事實はあるが、海上また海中にも神仙境の實在するは別個の問題で活事實である。其他天行居の出版物をよく讀み、更らに

ナマナカな學問識見をひと先づ棚に上げて虚心で石城山道場へ來て正當の手續を経て拜觀し得られるものを拜觀し、聞き得ることも聞き得てから判斷せられても遅くはあるまい。物事は何でも一面の理窟だけで其れに關係した活事實を抹消し去るわけには行かぬ。たとへば神無月といふ言葉についての學者の考への如きもそれだ。其の月には全國の神々が出雲へ集まられるので、出雲では神有月といひ其他の地方では神無月といふと申し傳へられて居るが、カンナツキ（カムナツキ）は實はカミナへ月（神嘗月）の義で、この月に新穀を神に供へるので此の稱呼が起つたのである。けれど折も折かな丁度その頃に地上各方面各神境から代表神が出雲の幽宮へ參集せらるゝ事實があつて、しかも此れは随分古くから行はれて居る。普通の歴史眼より云へば、神武天皇の御代でも決して今日の日本國土がヤマトノ國ではなかつた。その政權の行はれて居たのは神武朝以後數百年の所謂缺史時代も近畿の一部に限られて居たのである。けれども幽神界の方ではハツキリ年代は分らないが餘程古くから此の地上各神界の代表神が毎年此の時節に出雲の幽宮に參集されて種々の會議を

せられた嚴然たる事實がある。だからカンナツキに就ての俗説とみられて居る傳説の如きも偶然の符合とでもいふか兎に角俗説として否定するわけに行かない事實が今日も尙ほ行はれて居るのである。カンナツキに就ての如上の傳説が世に行はれて來たのは左のみ古いことではないが、神界の事實が自然と何時とはなしに世人の頭腦に無意識的に映じて斯かる傳説を生じたものとみるべきであらう。斯ういふやうなわけであるから、たゞ一面の理窟だけで、みだりに古傳を斥けるやうな科學的研究なるものは随分危険を伴ふものである。

x

x

x

石城山上各所から出た百數十個の祭器、ヒラカ、ヒラツキ、タカツキ等に就ても其の形が甚だ小形で高さ一二寸巾も一二寸以内のものでオモチヤのやうなもので、太古の偉大な人達の取扱つた祭器としては少々受取りにくいといふ人がある。神武紀、椎根津彦と弟猾とが仙道で所謂身外に身を生ずる術を以て敵の重圍をくゞりぬけ天香山の土を取て來て其の土で多數の祭器を造らしめられて天神地祇を祭らしめ

られたことが少々傳へられて居るが、兩人で取て來た土は少量のものである。それで天平瓮八十枚及び嚴瓮等イッヘを造つて机の上に並べるので其のヒラカ等が極めて小形のものであることは申す迄もない。八十枚ヤツキは只だ多數の意味であり十枚を八つ合した八十枚の意ではないけれど兎に角百に近き多數である。(其の數のことは太古神法に關することで公刊物などには書けぬ。)さればと云つて上古の祭器が皆な斯かる小形のものといふのではなく、普通の献饌等に用ひらるゝものは現に神宮等にて用ひらるゝ位の大きさのものであつたけれども、特殊の神事に於て一つの机に多數の祭器を安置することを要する場合には此の小形のもが用ひられたのである。(石城山の古代齋場説に就ては先年雲堂先生も意見を發表せられ、又た今年春の『古道』紙上に小幡翁が書かれたもので大概説明せられて居ると思ふ。)

石城山に對する認識を更らに新たにせられねばならぬ時期が又た同志諸君を見舞はんとして居る。

埃及のピラミットの如き須佐之男神や思兼神の系統の神々の啓示によつて築造した石城山遙拜所の遺跡は支那にも印度にも南洋にも西部アジアにも米大陸にも將來學術的に發見せられるであらう。石城山上の日本神社正殿の直下より發掘した大磐石は少々思ふところあつて登山者結縁のために只今では拜殿前に手水鉢にしてあるが、實は太古の或る神事の最神聖所に用ひられたもので或る時期が來ると又た嚴肅に禁忌タブーせねばならぬやうなことになるかも知れん。

神界の實消息がわからぬと色々なヒガコトが人間世界を馬鹿にする。高窪博士の古事記研究で諸冊二神が全身に長毛の生えた御方であるとか、須神がヒノ川上で獲られた寶劍がギリシヤ渡來の石劍であるとか、天孫降臨は四國から九州へであるとか、さまざま風流な説があるのは、かつて博士の頭腦を通過した種々の文献から發生したガスのやうなものが靈媒の婦人に交渉する靈に反映してコンデンスされ藝術化されたものである。併し其の中には多少靈界の消息の片鱗を傳聞したかと思はるゝところもないではない。たとへば神界の中府は島根縣の上空にあるといふこと

の如き、石城山上の大神界が山口、廣島、島根各縣の一部及び日本海の上空にまたがつて居ることを云ふものゝ如くにも聞こえる。

天行居で潔齋モソイのことを八釜しく云ふのは佛教渡來以後の思想を訛傳したものでないかといふ人がある。途方もないことで、潔齋と太古神法とは不離の關係あり、最も明確に規定さるゝやうになつたのは倭姫命以來のことである。伊勢神宮の齋宮に就ては大いに述べたい意見もあり、畏れながら齋宮制の復興をも祈願して居るのであるが、その野宮千日の大潔齋の如きは古義を傳へたものである。其他神宮祭式等には太古神法に關聯したことが色々名残を今日に存して居るが、それを一々指示することは遠慮する。ちかごろではどうなつて居るか知らんが明治初年頃神宮に行はれて居た齋戒規則の如き頗る要を得たものである。その第一條には、
凡齋戒ハ私第ニ於テ居室飲食衣服等之ヲ平常ノ所用ト異ニシ猥ニ他出及雜人ノ面會ヲ禁ジ誠心潔清ヲ要ス

とあるが、猥りに門を出でず又た猥りに雜人と會談せぬといふことの如きは太古以來深旨あることで、重大な神事に當る人としては當然のことなのである。形式に關することではなく神界氣線との感格等の點から實際に必須のことで、佛道の影響を受けたものではない。

又た近頃同志にあらざる方面の人で、ひそかに天行居の太古神法について彼れ此れ云つて居られる人があるさうであるが、太古神法の至極のものが紙や木や土や金屬で造つた何かであるかのやうに取沙汰されて居るのは滑稽である。太古神法至極の大事はそんなものではなく祕言の類でもない。

石城山の神籠石築造が埃及のピラミットなどよりも古いといふのではない。石城山は太古以來大神事の齋場であつたが、或る時期に其處へ神籠石が築造されたであらうといふことは吾々は何度も云つた通りである。極言すれば石城山が太古以來の大齋場であつたといふことは必ずしも神籠石と關係のないことであるから此の點は

誤解のないやうに願ひたい。このことは石城山開きの折から機會ある毎に論説した通りである。しかし今日一部の研究者によつて假定されて居るやうに比較的新しい時代に築造されたものとも私としては考へて居らぬ。一部の研究者の所憑とする文献の如きは積極的の證據にはならぬ。私一個人としては石城山の神籠石が九州あたりのそれと年代の上に如何なる關係があるかといふことも考へぬではないが、少くとも神武以前のもものと認めてをる。或ひは案外にも甚だしき數字を以て遠ざかるほど古い時代のものであるかも知れんとも考へらるゝ事情がないでもない。

奇蹟を間斷なく示されなければ信仰の維持が出来ない人々ほど氣の毒なものはない。三千四百餘年前、シンの曠野を出で、後イスラエル人はレビデムといふところに達したが飲料水が得られないので神の攝理を疑つた。彼等は直接の指導者たるモーセに怒罵をあびせた。彼等は飲食物が豊富に供給された時などには其の直前の不信仰と不平不満とを深く恥ぢたが、忽ちにして又た忘れ、再び信仰を試される場合

には失敗して了ふといふ風で、こんなことが何度となく繰返された。彼等をエジプトから救ひ出したモーセの心事を疑ひ、大衆を窮地に陥れて自分ひとり富裕の身にならうと企んで居るのだらうと非難し、石をもつてモーセを撃ち殺さうとさへした。併しながら慄悍なる蠻族アマレクの大軍に包圍されたとき、モーセが『神の杖』を手にして大軍を潰走せしめたときには、いかな信念の動搖しやすいイスラエル人も一人として感激の聲をあげざるものは無かつたであらう。

水位先生は『神通は信と不信とに在り』と大書された。これは神通の達と不達と正と不正と靈と不靈とは信と不信とに在りといふ意味である。このことに就ては曾とも書いたことがあるけれど重複を厭はず此處に又た書くのは近來いろ／＼考へさせられることがあるからである。『信』といふものほど世の中に不思議な力をもつものはない。心靈の科學的研究といふやうな態度では或る程度以上の神祇が感應を拒まれる理由を深思して貫ひたいのである。又た信力といつても何等かの機會に突發

的な白熱的信力によつて神異をみることもあるが、それは實は寧ろ異例であつて、正神界の神祇に感應せんとするものは節操ある不動の信念を持續することが第一にして唯一なる祕義である。正神界を覗いてみることの出来るレンズは正しき信力のみである。シンの曠野を出で、シナイ山に向ふイスラエル人の大群のやうに、奇蹟の間斷無き出現によらなければ信仰の維持が出来ないやうでは、なさけないことだ。

x

x

x

くごいやうであるが神異的史實を頭から否定して古代史の研究をすることは絶対に無茶な話である。大概の此頃の學者は天照大御神の居られた高天原は南洋方面またはアジア大陸の東南部であるといふ風に考へて總ての問題を組立てやうとして居る。(所謂北方説を唱へる人たちも同様な意味に於て妄想である。)須佐之男尊の天上往來も政治的戰鬪的意味ありしものとするが、(そして彼等は須佐之男尊を出雲國の英雄とするが)須佐之男尊が大艦隊を指揮して南洋方面に行つたり來たりせられたと考へるより外に逃げみちがなくなる一面に於て古代交通文化の極めて幼稚なりし

ことを云ふ。これではぐあひが悪いと考へる連中は暴風神話などの脚色された説話であらうと苦しい結論を求めたがる。ドイツの有名な犯罪學者が教室で突然に起つたピストル喧嘩について其教室の學生全部に報告書を書かしてみたら、誤謬の最も少いので廿六パーセント、多いのは間違ひが八十パーセントを含んで居たといふ。目前の事件を記述させても此れ位に相違するのであるから如何に神典だの國史だの勅撰の書だのと云つたところで悠久な古代の消息を整理して書き傳へたので、それに其頃の政府の或る政治的意圖もあつて筆を執つたらしい點もあるので史實を傳へたものとして學問的にあまり價値のないものだといふ人もあらうが、神界の實相に照合して我國の神典が主旨要綱に於て殆ど符合して居る活事實は、奇跡といひたいほどであつて、神明の幽助ありたればこそだ。高貴の大神になると其の神徳の廣大靈妙につれて分形變化自在であるので、その御蹤跡の片鱗を各方面より集めて考へると統一がなく概念を得がたく其處に色々の俗智による疑問が生ずるのである。神話學とか民族學とか言語學とかいふものも要するに人間が俗智によつて一つの型を

拵らへ、その型によつて判断して行かうとするのだから無理が出来る。日本の武士道では必ず堂々と名乗りをあげてから斬り込むものと相場をきめて居るが、伊賀の仇討では又右衛門は辻の茶屋から躍り出して拔打に物をも言はず馬上の甚左衛門を斬つて捨てた。これに類することは古來の兵法者に極めて多い。武士道の精神は微塵も崩れぬが、武士道の『型』に囚はれて動きの取れぬやうな馬鹿者は昔の日本人には少なかつた。

×

×

×

茶をのむとき碗に一ぱいこぼれるほどついで貰つてはウマイものではない。水をもむとき碗に半分足らず上品についで貰つてもウマイものではない。茶を急いで飲んでウマイものでない。水を愚圖々々してのんでもウマイものでない。萬物萬事自ら天の道がある。この道が古道である。天道である。神道である。皇道である。天行居の所説を部分的に彼れ此れ抄出して矛盾して居るやうにいふ人は、茶と水の區別もわからない人たちである。

×

×

×

天龍齋先生は太古以來神人一系の神祕を固く守つて其他に一切私意をはさまれず、恰かも寶珠を抱いて龍の深淵に蟄栖するが如くであつた。水位先生は一面に於ては神界に出入し神祕を畏れられたが又一面に於ては飽くまで學究的で其の天分と師受とに満足せられず夏々乎として獨造孤詣、先人未踏の地を拓かんとせらるゝ風があつた。それだから水位先生の多くの著書には非常に立派な意見があると同時に考へ誤られたこともあるであらう。これは人間的な努力としては致し方なきことで本居先生や平田先生だつて同じことである。けれども其れは水位先生の人間的努力の方面のことであつて『異郷備忘録』の如きは只だ如實に實見實聞のまゝを記録されて一片の私意をはさまれたものでない。又た人間的努力の多數の著述類とは別に神仙直授の祕事のみを謹書されたものもあるが其れは故あつて玄臺の祕府に密封されて了つた。私が其れを獲たのは天授である。水位先生の道友であり親族であつた宮地嚴夫翁にさへ語られなかつたことゞもである。

水位先生のことだと思ひつゝいたが、先達てのこと午睡中に面河溪の勝を探つてから手箱山に登つたときには例の山上の鐵鎖に萬延元年庚申九月の銘があつたのが記憶に残つたやうに思ふ。この鎖をかけられたのは萬延元年の六月であること『日乃御綱』に書いた通り斷じて間違ひのない記録によつたのであるが、いかなるわけであらうか合點が行かぬ。或は又た其年の秋になつて何かの事情で改造されたのであらうか。まさかそんなこともあるまいが……。

本田親徳先生が所謂『治國の大本、祭祀の蘊奥』と力説された太古神法の祕事は堀天龍齋先生が紹統者であつた。本田先生は以靈對靈神人感合の原理と法則とを探究成就されたが、此の神人感合の太古神法に關する高天原以來一系ともいふべき大祕事を古傳のまゝ承け傳へられた人は天龍齋先生であつた。これは世間に披露するには及ばぬことであるが、天行居同志たる人々だけは心得ておくべきであらう。

地上人類みな神種にして其の靈智は神に出るものである。禪の如きも不生不死心靈獨立を證し修養境界を鍛練する道具として使ふには面白く即ち以て大丈夫の學なりといふも妨げ無かるべけむも、其の悟境に囚はれ禪に縛せられて正因果の天律を昧却し、格神以本の大義を忘れて神祇を易るアチドに至て直ちに是れ魔道と化す。最も注意すべきことである。要は天狗にならぬことである。

柵尾の谷の晝尙ほ暗き老杉の上で二人の野天狗が對談して居た。『ごうだい、貴公は明慧上人の顔をみたことがあるかい。』『見たことはねえな、いつでも光り輝いてこつちの眼が眩んで了はあね。』『をらあ一度見たせ、數日前のことだが上人が途中で左手の珠數を落しかけたとき右手で受け取つたから珠數は地上に落ちなかつた。そのときに一寸見たせ。』この咄は作話か何か知らんが面白い話である。明慧上人は四六時中いつも謙虛な境地に居られたので高慢世界の居住者たる天狗の眼でみるこ

とは不可能であつた。珠數を落さず受取られたとき思はず一寸得意の氣が鼻頭に浮んだ其の瞬間に天狗めが拜顔したといふのである。われ／＼古道を奉ずる者の大いに戒慎すべきことであらう。老子七十三章には『敢ニ勇ナレバ殺サル、不敢ニ勇ナレバ活ク、此ノ兩者、或ハ利シ或ハ害ス、天ノ惡ム所、イヅレカ其ノ故ヲ知ラン、是レヲ以テ聖人猶ホ之ヲ難ンズ』とある。天明年間に上木した長門國被謁道人の註には『不測の天意、聖人猶ほ以て知り難しと爲す、故に寵に居て危を思ひ、惟だ畏れざることなし、これ其の不敢に勇にして天の永命を祈る所以なり』とあつて甚だ人間に靈驗があることを書いて居る。照道大壽眞も切々として河野久氏に訓戒し『いかなる天縁ある者もモウこれで自分も一人前だと云ふやうな慢心を生ずれば正神界と絶縁して取返しがつかなくなるぞ』と云はれた。易經には謙の卦で六動みな吉を説き、六十四卦中たゞ此の謙の卦のみに六動みな吉を許した。キリスト教では『傲慢は最高の天使をして惡魔におとし、謙遜は墮落せる肉と血を天使の位に昇らしむ……傲慢を以て單に不都合なる性質となし、又た謙遜を以て單に高德として

はならぬ、そは一は死にして一は生命であり、又た一は地獄にして他は天國であるからである、諸君の心中に傲慢存在せば之れ即ち墮落せる天使を宿すことであり、又た諸君の心中に謙遜存在せば之れ即ち神の羔を宿すことである、諸君が若し傲慢の活動が如何に諸君の靈魂を毒するかを見れば、この毒蛇を殺さん爲めにはたとひ片手片目を失ふと雖も厭はないであらう……』と絶叫して居るが、いかにも尤も千萬である。

私は茲に一昨年の春歸天せられた天行居顧問荒井道雄大人のことを思はざるを得ぬ。荒井氏は如何にも謙虚で其れが日常生活の上にも現れ、極めて儉素な生活をして居られた。日々黙々として只だ過失なからんことを畏れられるかのやうに見受けた。よほど煙草が好きであつたが、バツトを丁寧に二つに切つて、それを時折大事に吸はれた。酒も少量を用ひられた。石城山麓は山村のことであり諸物資が安價だからであるが、毎月一二回本部の諸君を招いてお得意の天ぷらなど拵へて食卓を共にしたりせられても酒、煙草一切をこめて一ヶ月の生活費が三十五圓あれば充分だ

といふことをいつも私に話して居られた。旅行せられても必ず何時も二等に乗られるわけではなかつた、長距離でも三等で我慢せられることが少くなかつた。大人は痼疾の神経痛もあるので私は感心せず『汽車は二等にせられてはごうですか』と何度も云つたが、たゞ穏かな微笑をして『さうですね』といつて居られた。天行居に對しては物質的にも精神的にも多大の努力をせられたが、それを鼻にかけられるやうなことは微塵もなかつた。同志の中には荒井大人を無爲無能の人だごみて居た人もあるらしいが、靜かに黙々として山麓に起臥して居られるだけで、沈着な物柔らかな敬神修徳の感化を來山者に與えられた。修齋者が茶話會など催して居る席へ大人がやつて來られると駘蕩たる春風に包まれるやうな氣がしたらしかつた。天行居の同志は荒井大人の遺徳を忘れてはなるまい。

堀天龍齋先生の謙虚ぶりと來たら、此れは又た格別なもので、『殆んど聖セイだな』と私は幾回か畏れ入つたことがある。先生の大きさと深さが私には測量できなかつた。大徳といふのがあんな御方のことであらうか。

さて省みて自分自身のことになつてみると、何とも申譯のない次第で、通身白汗だ。僕のことだけは當分ナイショにしておいて貰ひたい。言ふものは知らず、知るものは言はずといふが、多分僕のことであらう。

謙虚といへば、私は何時でも大楠公を聯想する。楠公の忠誠や武略を崇拜する人は多いが、何故に公の輝かしい謙虚な姿が認められないのであらうか。謙虚の徳を大成された大人格者として近くは東郷元帥があるが、時折斯うした人を天が人間界に降すのは『人間の見本』といふものをみせられる意味なのであらう。乃木將軍は那須野時代に二錢で酢を買はれたことまで明細に記帳せられ、東郷元帥は晩年でも針仕事までせられたさうであるが、それも御性格の自然的な發露であらう。

大正十三年春、同志諸君へ公布した印刷物の神示の中に『しりつとゆい行きたかひまへつとゆ伊行きたかふ、このまかものをうちきたためねばならぬ云々』といふこ

とがあつた。これが米露を意味するものであらうことは想像に難くなかつた。けれども其頃の露國は革命直後で其の兵力戦力は問題にならず如何に爲政者が此の方面に努力したところで警察の代用になる位のもので國際的には何等の意義をも有するものでないと思はれて居た。(其頃の新聞雑誌を参照せよ)吾々も何故にこんな神示があるのか只だ思想的の意味で警戒せよといふ意味ではあるまいかと疑つて居た。然るにどうだ、其後十年間に赤露の兵力量と内容とは数十倍、否な文字通り數百倍の躍進を遂げ、其の放列を極東へ向けて來た。

ひとり赤露の問題のみではない。今後十年間が有らゆる意味に於て世界のドタンバであらう。天行神軍は昭和六年以來石城山上の戦時修法場で既に數回の大神事を執行し、又た白頭山天池を始め各方面に必要な靈的施設を行つたが、我が神軍の態勢は無論まだ平時態勢である。神界の命令一下して其れが一夜の間に戦時態勢に改まる日は、あまり遠い將來ではないかも知れん。

しかし吾々の所謂『靈的國防』の意味は廣汎なものである。某所のレーニン飛行

團の行動に不便な氣象變動を起す方法に就て考へたり、愈々の正念場に某國艦隊の砲術長の頭腦に錯覺を突發させる神術に就て工夫したり、敵の爆機が國土を見舞ふとき其の損害を可及的少くする修法について研究したりするばかりではない。もつと根本的な、もつと廣い意味に於ける靈的國防について寤寐考へつゞけて來て居るつもりだ。國內的にも赤色バチルスの靈的消毒作業など重要な役目がある筈である。

世界の大難局は一日でも早く來るだけ地上人類の犠牲は比較的少くて濟み、遅くなればなるほど慘狀は大きくなる。吾等は事を好む者でなく平和の熱愛者である。若しも萬に一つでも來るべきものが來らずに濟むならば其れが爲めに吾等は天上天下の嘲罵の的となつても大満足である。けれども其の來るべきものゝ來ることだけは天にも地にも免かれることの出來ぬ天の數である。故に天關打開『促進』を祈願して地上生類の犠牲を少しでも輕減せんとすることが吾々の悲痛なる大願である。

冷静に世界の歴史をしらべて回顧すれば愈々世界のドタンバと考へられたことは何度もあつたが、併しどうにか濟んで来たから、目前の大機など云つても何とかなるだらうと考へてる善人が澤山あるが、我日本國だけでも行き詰つて此のまゝでは抜き差しならぬ問題は澤山にある。人口問題の如きも其の一つだが此れは三十年前來あまりに論議されて少し時効にかゝつたかのやうに見られるので世人の注意を惹かなくなつた。けれども事實は時効にかゝつたどころか年々痛切な問題となりつゝあるのだ。上田貞次郎氏の研究によれば十五歳から五十九歳までの内地生産人口が今後二十年間で一千万人増加する。これは生れた子供の生長によるので産兒調節運動などの追ひつけぬ點である。大正九年に於て働く人の數が三千万、昭和五年には三千五百万、此の間に五百萬人増加だけでも職業不足に惱んでをるが、これが又た一千万人増加したらどうなると思ふ。しかも此れは必然にやつてくる問題なのだ。

日本國は敵の空襲に對して地理的に惠まれて居ると自惚れて居る者も大分あるらし

いが爆撃機の航續力は日に月に進みつゝあることを忘れてはならぬ。又た實戰となれば萬事公算を無視した超常識的事件が必然的に出現する。机上のイデオロギート實際の場合とはわけが違ふ。

ユダヤ問題についても十年前一冊子を刊行したことがあるが、近ごろは日本の言論界にもユダヤ資本の流入を耳にする。ユダヤ聖典タルムードには『非ユダヤ人の黄金はユダヤ人の行使すべきものなり』といふやうな意味のことがあるが、黄金は一切を意味して居るのである。フリーメイソン最高幹部の一人は曾てパリに開設された其の事務所に於て『フリーメイソンは世界を紛亂に陥れ最後の目的は世界共和國の建設である』と聲言したが、爾來三十年の世界の活歴史は何を語りつゝあるか。見方によつては今や我が日本國は世界フリーメイソン國家の中に唯ひとり毅然として彼等と對峙して立つて居る。マルキシズムの本當の歴史は少くとも二千年來のものである位のことは考へて貰つてもよからう。

併し此の問題は甚だ複雑な問題で、見方によつては正反對にみらるゝ現象やトリツクの工作やが織込まれて極めてデリケートな難中の難問題である。とにも角にも此の世界最大ともいふべき謎が解ける日は近づきつゝあるが、その清算書を見せられるまでが厄介千萬だ。かくの如き總ての難問題が殆ど日本國を目標にして愈々ドタンバに押しつめて來た。

x

x

x

時局の進展につれ今後全國の同志諸君を昂奮させるやうな事件が内外に頻發するであらうが、まだく昂奮してはならぬ。飽くまで土面灰頭で腑抜けかと思はれるほど沈着でなくてはならぬ。しかし沈着でなく本物の腑抜けになつては問題にならぬ。

x

x

x

天行居は原則として信仰團體であり神道團體である。従つて其の爲すべきことも守るべきことも自ら範圍がある。善事ならば何を爲してもよいけれども實際問題と

して其れは却て天行居の使命に伴ふ能力を削る結果になることもないとは云へぬ。たとへば世の中に善事を目的とする事業團體は何百何千とあるけれど其の團體に誰れでも悉く加入するわけに行かず悉くの團體へ寄附金をするわけにも行かぬのと同じことだ。各々其の立場と因縁の遠近があつて個人でも團體でもホドを守らねばならぬ。ホドを忘れて見榮を張ることは感心いたしかねる。天行居は靈的には極めて強大な團體であり其の根據は無類の正確なものであるが、皮肉なる天の攝理か其れとも深遠なる御神慮によるためか現界的形態は極めて小さく殊に其の財的能力は甚だ微弱だ。吾々は其の事實を正視してホドを守らなければならぬ。財的能力を惠まれる時節が來たら、それは又た其の時のことで其れまでは決して無理をしてはならぬ。全國同志諸君は能く其邊のところを考へて色々の事業の註文を本部に提出されることは今しばらくの間我慢せられてはどうであるか。本部の方々も無い袖は振れず、強いて無理をさせるやうなことがあつてはならぬ。大機直面だといつても天行居では軍艦や大砲を造るわけでもなく愈々の場合には二三月あれば相當の準備は

出来るし、其時になれば又た其の便宜も得られるものである。今しばらくの間却て消極的に堅實に陣營を固めた方がよろしからうと思はれる。それはやがて眞に積極的に躍進せんとする準備を意味するものである。くだいて云へば全國同志諸君の負擔が餘り重くなることはよろしくあるまい。大機直面、泥坊をみて繩を絢ふやうなことでござるかと思ふ人もあらうが心配は要らぬ。今後の大戦は始まつたかと思ふと直ぐに濟むといふ専門家の説もあるが、私は左うは考へぬ。いよく見極めがついてからでも必ず準備は出来る。

天行居でやりたいことは色々あらうが、大體において次ぎに表示する如きことも一つの考へ方であらう。

天行居事業

- A、必ず爲すべきこと
- B、成るべく爲したきこと
- C、速かに爲したきこと
- D、可然時期に爲したきこと
- E、成るべく速かに爲したきこと
- F、可然時期に爲したきこと

天行居ではCの事業だけでも現状を以てしては容易であるまい。他の事項にまで手は着けられまい。併しCの事業が完成しなければ他の事業に絶對着手せぬといふのも窮窟な考へだ。實際問題としては天行居の經營上の都合や統制上の都合もあり便宜のあるに應じて多少變通臨機の工夫も必要であらう。要するに地方の同志諸君が考へて居られるほど本部の方々は氣樂であるまい。私は今日では隱居のやうなものであり、石城山本部を訪問せざること既に三年半に及んで居るので本部の内情にも迂遠であるから斯ういふ問題について語ることは資格が少々怪しいけれども、『天行居は天行居の天行居なり』といふ天行居組織上の原理に基き、四海と春風に坐し天下と明月を分つといふ心境から、全國同志諸君の御參考までに一言したのである。

四百年前、茶道の聖者ともいふべき珠光は『わら家に名馬をつなぎたるがよし』と言つた。吾等古道を奉ずる者は、斯ういふ風韻ある含蓄が多少必要ではあるまいか。松下村塾のやうな『わら家』からも多數の名馬が出た。珠光が云つた意味はそ

んなことではないけれど、とにかく如何に非常時だと云つてもブリキ罐のやうな活動ばかりに必死とならず、古渡りの茶器のやうな底光りのする濼いところも少々存在の意味がありはせんか。足柄山の簫だの箴エビラの梅だのいふものも、日本人の襟度であり風懐であらうと私は考へる。とにかくにも全国の同志諸君は此際退一步の工夫はないものか。すこし冷静に考へて、腰の据りを落ちつかせてはどうか。中には百八十度轉向して考へ直してみられる必要ある人もあるかも知れない。

×

×

×

石城山開闢以來の天行居の大精神『天行居は天行居の天行居なり』といふ組織上の根本原則が眞に腹入りして居る人が少いやうに思はれてならぬ。『石城山はをらの山だ』といふ覺悟が同志各自になればならぬが、果して眞に其の覺悟ある人が何割あるであらうか。同志に新舊の區別なく、今日加入する人も明日加入せらるゝ人も同様である。正神界の意思を體現した天行居出現の第一理由として他の神道團體等と全然異るところの此の組織上の原理は萬古不易のものである。これは決して經

營上の便宜から考へ出したのでもなく時代おくれのデモクラシイにかぶれたわけでもない。經營上の便宜からいふならば信仰團體としては此の正反對に行つた方が都合がよいこと誰れにでもわかる筈だ。

私が天行居の創立者であり又た第一期の宗主であつたといふやうなところから、記憶力のよすぎる一部少數の同志の中には未だに何だか私といふものが天行居の奥の院のやうなところに潜伏してゐるローマ法王のやうなものでゝもあるが如く考へて居られる人があるらしい。それが爲めに私としては却て色々の迷惑を蒙つてゐることを近ごろ發見したが、それは我慢するとしても天行居の根本組織原理について、一應白紙になつて見直される必要はないかと思ふ。

他の諸々の教祖神道の如き團體と異り、天行居の特色とする重大なる一點は、教祖とか教主とかいふ尊崇的中心人物の存在を認めざることで此事は石城山開闢以來一貫して力説して來たところである。即ち全國同志は均等の機會を以て直ちに神祇を中心として結合し『天行居は天行居の天行居なり』といふ憲範第二條の原則を萬

古不磨の鐵則として立ち、此の大精神に基きて神道天行居憲範は制定公布されたものである。天行居同志は此の原則を正確に認識して本部中心の統制を自發的に覺悟尊重して活動せらるべきものである。『天行居は天行居の天行居なり』といふ自覺が本當に腹に入居れば、當然必然本部中心の統制を尊重せらるべき筈で、それが出來ないやうな人は、天行居の制度や組織を如何に變改したところで心から本部中心の統制を尊重せらるゝものではない。換言すれば天行居の統制は神祇一本の統制であつて神祇と全國同志との間に勿體をつけた人間の介在を許さぬ。これが他の教祖神道等の團體等と組織の原理を根本から異にして居る點で、正神界の意圖を體して天行居が出現した理由の重大な一つである。このことは私が石城山開關當初より宗主の地位を退くまで『古道』紙上に於ても道場の席上に於ても機會ある毎に終始一貫して力説して來たところであり、又た自ら實行して來たところである。昭和三年夏以來『古道』紙上に公表した意見だけでも今一度検討せられてはどうかである。憲範の制定も要するに此の神慮を體して之を法文的に編み出したまでのものである。

る。

いろいろのことを御問合せになる人があるが例によつて返信料が封入してあつても私は大概返信せぬ。將來の戦争の時期と其の経過及び結果等についても正神界では決して明白に豫言せられるものではない。斯かる豫言を云々するといふことは眞に神界の經綸を知らず神示の何たるを知らず正神を裝ふ邪靈に愚弄されて居ることを告白するやうなものである。(部分的には多少の例外がないわけではないが。)

先日或る人から天行居の神名木車の圖について彼れ此れお問合せがあつたが序でに此處で一言しておく。神名木車の圖は大正十二年發行『天行林』に於て發表されたものであり、其後に色々の方面で此れを焼直したやうなものが新聞雜誌などにも出たさうであるが、それは吾々の介意せざるところである。

この山さへ越せば自分の責任は軽くなると思つて、年々やつて来たが、一つ越せば又た向ふに山があり、山から山へとつゞき、しかも段々と山が大きくなつてくるやうな氣がしてならぬ。

天行居のことは人間の理窟通りには參りかねることが多い。一小俗事と思ふやうなことでも案外なことがある。海老藏の景清が小幕から顔を出す式のものなんだから。

天行居内外の現象等が直ちに活きた一巻の繪巻物である。しかも偉大なる天神の構想の反影たる玄臺の祕冊であつて、これを讀まんとしても其人々々の天縁程度、道力程度、信力程度に理解の範圍が限定されて居る。しかも如何なる人と雖も其の最後の二頁に讀み到るまでは真相が判然せぬやうに仕組まれた不思議の祕典である。

春風秋雨六十年の天機、近くは七年前來の重祕の宿題たりし石門神社は、百パーセントくしび極まる産靈紋理によつて俄かに御造營の計劃となり、本年八月起工豫定を又た繰上げて六月から着手、めでたく竣工した。社殿の周圍へ二間物の吉野杉を植込むことだけを明年春に延期した。私としても一千日間のあらゆる危難を突破して此處まで来たことは格別なる御神助によることゝ感激して居る。來る十月二日洗清等奉仕、十月六日夜嚴祕太古神法による幽齋鎮祀神事、十月九日朝奉幣。奉齋神名を畏れながら謹記し奉る。

主座

天照大御神

布都大神

副座

高皇產靈神

少彥名神
大穴牟遲神
大山祇神
大綿積神
豐受姬神
事代主神
高雷神
閻雷神
雷神
苔生神
八意思兼神
天太玉神
石凝姥神

長白羽神
天日鷲神
津昨見神
天羽槌雄神
天棚機姬神
櫛明玉神
手置帆負神
彥狹知神
天間一箇神
天鈿女神
天手力男神
天地八百萬神

×

×

×

石門神社鎮座祭のしるしとして此の小冊子『石門漫録』^{セキセンマンロク}を一部の同志諸君へ進呈するつもりで筆を執つた。(昭和九年九月秋、石門神社工事完成後三日、無方齋の南軒に於てしるす。)

附 記

この小冊子は成るべく隣人から隣人へ讀んで貰ふやう取計つて頂きたい。同志諸君の正しい信念を培ふために多少のたよりとなり、又た更らに未だ天行居の存在を知られざる人たちへの道しるべの一つともならば幸ひである。

天行居^{テンカウキョ}に關することは一切何事でも『周防國熊毛郡田布施局區内、石城山、神道天行居』宛に御照會ください。機關雜誌や同志に加入する手續案内書などがあります。其他祭祀、修法、出版、會計等すべて一切のことは石城山の本部で取扱つてをります。宮市の鳳凰寮は石城山の本部から十五六里も距つてをり何事も取扱つて居りません。石城山の本部では『古神道秘説』『神界の經綸と天行居の出現』等種々の出版物も取扱つてをります。

讀み返してみるのが面倒で、書き流しのまゝ印刷所へ廻したので、わけのわからんところは皆さんの氣の濟むやうに御判讀を願ひたい。

御面會のことども

- 一、小生は滿三年の籠居期は經過致候得共尙當分引續き籠居の精神を守りたく存候、就ては御面會等につき規則がまじきことを申すは不本意なれども色々事情も有之御諒承願上度候
- 二、前以て書面にて日時御豫約ある御方に限り半時間位御面會可仕候
- 一、尙ほ成るべく當日御曳杖一時間前に電話にて當方の都合聞き合せて被下度、突然の御來訪はごなた様に限らず御面晤仕らず候(電話三六一番)
- 一、毎年六月中旬より十一月上旬迄の間が好都合に御座候、殊に十二月、一月、二月は御容赦被下度候
- 一、御面會は午前九時十時頃、又は午後二時三時頃が好都合に御座候、夜間は一切お目にか、らず候
- 一、御約束いたし居りても當日となりて俄かに差支ある場合も必無と申上げ難く、斯かる場合御立腹無之様願上度候
- 一、七むつかしい話や、しめツばい話は御免蒙り度候、景氣のよい話や、やんわりした世間咄位ぬなごころを拜聽仕度候
- 一、當方支關に面會謝絶の札ぶらさげありても約束ある御方は其れにかまはず聲をかけてみて被下度候
- 一、當方は三田尻驛より七八丁、自動車も門前迄参り候

昭和九年秋

友 清 磐 山



昭和九年九月三十日印刷
昭和九年十月九日發行 (非賣品)

周防國佐波郡宮市

發行人 友清 操

廣島市綠葉町五十一番地

印刷人 佐伯卓造

廣島市綠葉町五十一番地

印刷所 株式會社 佐伯便利社

周防國佐波郡宮市

發行所 神道天行居鳳凰寮

終

